

俳句雜誌

令和六年七月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十七卷第七号

# 水 明

2024 7月号



《今月のかな女》

古蚊帳に入りきらぬほど子を生みし

(句集『龍膽』)

長谷川かな女

一家団欒の大きな卓袱台を片付けて寝床の支度をする。家族が多いと蒲団を出すだけでも大仕事なのに、蚊の出る時季ともなれば部屋いっぱい蚊帳を張らなければならず、朝にはその逆の仕事が待っていた。本句は、蚊帳が全く姿を消した時代では想像できぬ庶民の暮らしの一端であり、親が子の名前を間違えるほどの子沢山一家の姿を活写している。寝言を言いながら、蚊に刺された脚を搔いている子が見えてくる。

(鬼之介・註)

今月の巻頭句

季音雪

万緑や馬上の一矢的を割る

大橋迪代

季音月

切株に腰を預けて初夏の風

松宮保人

季音花

初めてのコーラを飲む子夏来る

石川理恵

水明集

強面の忠義面して義士祭へ

清水佳子

鼓笛集

やさしさのある句と記され風薫る

綿引まり子

山紫集

当て所なく連れに相槌残花道

篠原さよ子

# 水 明

令和 6 年  
7 月 号

今月のかな女

今月号の巻頭句

破 顔 (作品)

なぞなぞからそそりへ (近詠)

アロハ虹 (近詠)

百尺竿頭 主宰作品の鑑賞

ゆずり葉 季音月評

季音「雪」 (同人作品)

季音「月」 (同人作品)

季音「花」 (同人作品)

『水明誌』を繙く

現代俳句鑑賞

☆水明賞受賞者ノオト

○自選二十句

これからは言葉探しの旅へ

山本鬼之介

網野月を

五明 昇

五明 昇

檜鼻ことは

大橋廸代 大村節代  
小倉倭子 ほか

松宮保人 大場順子  
梅澤佐江 ほか

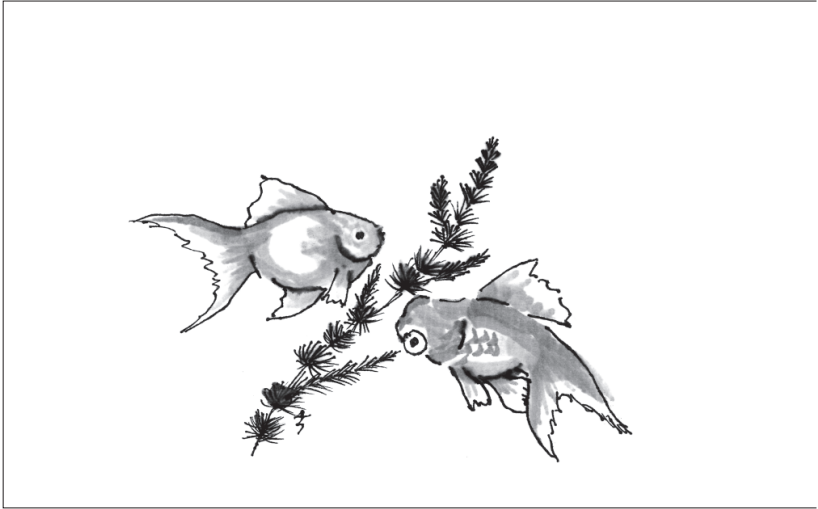
石川理恵 野田静香  
河野はるみ ほか

杉本青三郎

網野月を

梅澤輝翠

網野月を



○自選二十句

熱い熊谷句会のマドンナ

越田栄子

俳誌望見

近藤徹平

染谷風子

水明集

清水桂子  
新 暦文

菅原卓郎  
ほか

水明集作品評

山本鬼之介

水琴窟 (水明集五月号鑑賞)

池田雅夫

鼓笛集・私の一句・発展基金御礼

曲淵徹雄

句集喝采

山紫集

水明運営組織

組織 図

水明例会報・各地句会報

風声・水明の記事他誌転載

夏行のお知らせ

後記

80 79 78 73 69 68 62 61 58 56 52 41 40 38 36

題字…長谷川かな女 表紙…内田恵子 カット…福田千春

---

---

破  
顔

山本鬼之介

山  
雨  
急  
ま  
ち  
か  
ね  
た  
る  
は  
秋  
田  
露

六  
月  
や  
疎  
水  
賑  
は  
す  
芋  
車

融  
通  
の  
利  
か  
ぬ  
男  
の  
更  
衣

---

---

---

喫水深し母港へ急ぐ鯉船  
最高の笑顔の箸を豆ご飯  
民宿の卓袱台重し夕螢  
身に余る金魚と暮らす画学生  
迫る銀輪青大将の眠る径

---

# なぞなぞからそそりへ

## 網野月を

春の風呼ぶをんな級<sup>し</sup>長<sup>な</sup>をとこ級<sup>し</sup>長<sup>な</sup>  
月を見る月を見てゐる春の月  
花依存症原稿用紙依存症  
あれとあれあれは分からぬ百千鳥  
カンガンカンガン春の踏切過信破綻  
狭き歩幅と遅き歩調と春惜しむ  
引き抜かば引き抜きにくき沼繩採る

句会の席で「なぞなぞ俳句」と評されることがある。決してなぞなぞを仕掛けているつもりはないのだが、読み手には謎が多いということである。ならば確信的に「なぞなぞ俳句」を作ってみようではないか、ということである。「級長」「月を」は何を表しているのか？何番目の「あれ」が分かっているのだろうか。加えて「そそり句」を作ってみた。不完全であるが。

案外面白い。嵌まってしまいそうである。



# アロハ虹

## 五明昇

麦の秋汽笛行き交ふローレライ  
クリムトの接吻長き夏館  
アステカへ遙かな想ひダリア燃ゆ  
ハワイ四島巡る出船にアロハ虹  
ネロ偲び聖堂に脱ぐ夏帽子  
短夜にロマの咽びやフラメンコ  
ティファニーを出でて西日の五番街

コロナ明けの昨年は、満を持して海外旅行を解禁、春にオランダ・ベルギー・ルクセンブルクを巡り、秋にギリシャ本土とエーゲ海を周遊した。今年は傘寿を記念して三十年振りのメキシコ・ブラジル・アルゼンチン再訪を計画している。  
旅こそ他人から奪う事なしに己が富む唯一の方法だと自認しているが、さすがに体力の衰えは如何ともし難い。これからは荷物の出し入れが無く、移動が楽なクルーズ船の旅に視点を移して、もう暫く無理のない旅を楽しみたいと考えている。  
旅路の折節に読む俳句はやがて還る故郷への「旅信」、とは第三句集のモチーフ。仮初の旅を仮初としないう努力を今後も続けてゆきたい。

# 百尺竿頭

● 主宰作品の鑑賞

五明昇

四月号

曲り佳き友禪の川冴返る

京友禪や加賀友禪に代表される友禪染は、江戸時代中期の絵師、宮崎友禪齋によって始められた。清流を利用して生地糊や余分な染料を洗い流す「友禪流し」は、かつては市内の河川の至る所で見られ古都の風物詩ともなっていた。早春の川辺に佇む作者の眼裏には、色とりどりの反物が川面を彩る往時の景色が懐かしく蘇っている。

半ドンは昭和の遺物さくら餅

今ではほとんど聞かなくなったが、平成の始めに週休二日制が導入される前、昼まで授業や仕事がある土曜日を「半ドン」と言った。「半」は半分の意味、「ドン」はオランダ語で休日を意味する「ゾンターク（ドンタク）」に由来すると云う。桜餅は桜の葉で餅菓子を包んだものだが関東風（長命寺）、関西風（道明寺）とも江戸の風味を今に伝えている。

春月や古城を偲び馬上盃

馬上盃は武将が馬に乗ったまま酒を酌み交わす時に使った

盃で、持ちやすいように脚の部分が長いのが特徴。戦国武将であった上杉謙信は大変な酒豪で、山形県米沢市の上杉神社には謙信が馬上で愛用したという大杯が現存する。月もおぼろな春の一夕、お気に入り馬の上盃に越後の銘酒を酌めば、春日山城から関東平野を睥睨する軍神の姿が偲ばれる。

長き日や「残日録」といふ日記

老いゆく日々の命の輝きを、いぶし銀にも似た見事な筆致で描いた藤沢周平の傑作長編小説『三屋清左衛門残日録』は、仲代達矢、北大路欣也主演の映像化でも話題を呼んだ。「日残りて昏るるに未だ遠し——」の清左衛門の心情には、老境に差しかかった万人の感慨が込められている。日永の一日、覚えずに筆をとって日録を記す作者がいる。

春炬燵足で挨拶して去ぬる

炬燵での懇談の最中、所用で中座を余儀なくされるのはよくある話だ。主人にはあらかじめ断つてあるので話の腰を折らず、炬燵の中の足で挨拶してさりげなく座を外すのが粋というもの。春になっても、まだ寒さが残っているため仕舞わずに使っている春炬燵だが、気の合う仲間が世間話を楽しむ

には格好の舞台で、楽し気な団居の雰囲気が伝わる一句。

五月号

### 艦長の袖の金筋風光る

海上自衛官(幹部)には冬服の袖口に装着する「甲階級章」、第一種夏服の両肩に装着する「乙階級章」、第二種夏服や作業服に装着する「丙階級章」の三種の階級章が付与されている。隊司令・艦長を務める一等海佐(諸外国の大佐に相当)には四本、艦長を務める二等海佐(同中佐に相当)には三本の金筋が光り、全隊員の憧れの的だが、一方で自衛艦が沈没する際には最後に退艦するという重い責任を負っている。

### 船名の「丸」の謂れよ春の濤

日本の船は昔から船名に「丸」を付けることが多く、外国にも「マル・シップ」として知られているが、その謂れには諸説がある。自分のことを指す「磨」を飼犬や刀、やがては船にもつけるようになり、「丸」に変っていったという説や、古くは問丸と言っていた問屋が、所有する船にも「丸」を付けるようになった問丸説など。昨今は規制も緩和され、様々な名前の船舶が登場、春の濤を蹴立てて快走している。

### 慎ましく句碑を浮かせり芝桜

三月三十日、別所沼公園で開催された「水明春の吟行会」

での主宰詠で、公園内にあるかな女句碑の「曼珠沙華あつま  
り丘をうかせけり」を踏まえた一句。明治期に女流俳句の草  
分けとして登場した長谷川かな女は、後半生の四十年間を浦  
和の地に住み、自由闊達な句風で「水明」を全国結社に育て  
上げた。句碑を取り巻く植込みには芝桜が盛りで、その可憐  
で慎ましい姿はかな女の人となりを偲ばせるようであった。

### 春の野に兔を招く亀の首

「ウサギとカメ」はイソップ寓話の一つで、足の速いウサ  
ギと足の遅いカメが競争をし、最終的にはカメが勝利する話  
だ。明治時代の初等科の国語の教科書に「油断大敵」のタイ  
トルで掲載されている他、文部省唱歌でも知られている。の  
どかな春の日、兔を競走に誘おうと首を伸ばす亀の姿はほ  
えましいが、ゴールを見据えて走る亀と隣や周囲ばかりを見  
ている兔では、何度走っても勝負が見えていいるのでは…。

### 地に指のとどく体操別れ霜

別れ霜とは晩春に降りる霜のこと。「八十八夜の別れ霜」  
とあって、立春から数えて八十八夜の頃に最後の霜が降りる  
と、野菜や桑や茶などに多大な被害をもたらすので恐れられ  
た。一方で「夏も近づく八十八夜」の歌詞の通り、この頃  
になると気候が暖かく落ち着いてくるので、いよいよアクテ  
ィブに行動する季節の到来でもある。各地でラジオ体操の集  
も始まり、早朝から元気な掛け声が響いてくる。

# ゆずり葉

◆季音五月

檜 鼻 ことは

小半を下地に銀座春の月 境 延昭

小半酒は「こなからざけ」と読んで二合半のお酒。人にもよりますが、まあまあほろ酔いの気分を楽しめる量のように。晩酌ならば、この辺で切り上げるのがよろしいでしょう。外で呑んでいるとなるとなかなかそうもいきません。どうしても二軒目、三軒目と行きたくなるのが酒飲みの性。春の月が夜空を照らす銀座ならば猶更のこと。有楽町駅と新橋駅の間の高架下が続く銀座コリドー街辺りを、次のお店をもとめて、彷徨っていらっしやるのではないかと勝手に想像しながら句を楽しませていただきました。しかしながら、小半と言うのは酒飲みのためにあるような素敵な日本語です。

余呉の湖はなれがたしと残る鴨 十倉和子

余呉湖は琵琶湖の北に位置し、鏡湖とも呼ばれているように、湖面や辺りの景色は静かに美しい湖です。十二月の頃でしたか、余呉湖を訪れた時、棧橋には多数の釣りが竿を構

え、冬の風物詩わかさぎ釣りを楽しんでいらっしやいました。湖面に賤ヶ岳が写る中、鴨や鳩などの水鳥が水面に遊び、まことに穏やかな景色であったことを覚えています。

作者が余呉湖を訪れた晩春の頃は、桜や菜の花が湖岸を彩り、空や山々が湖面に映し出される夕景は誠に美しいと伺います。訪れた誰しにも「離れがたし」と感じさせる美しい余呉湖の景色を残る鴨が語っているようです。

沈黙のアンモナイトにある余寒 高島寛治

確かアンモナイトを初めて見たのは中学生の時だったように思います。それが本物であったのかレプリカであったのかは定かではありませんが、その時の幾何学的な美しさが今でも印象に残っています。アンモナイトは、約六千五百万年前の中生代白亜紀の終わりに、恐竜と共に絶滅し、その化石は世界各地で見つかっているそうです。外観の美しい姿から鉱物と思われていた時代もあったようで、アンモナイトは「アモンの石」を意味するそうです。作者が何処でアンモナイト

をご覧になっているのかは存じませんが、太古の歴史を内に秘めたアンモナイトは、黙して語らず。アンモナイトの内に潜んでいる余寒だけを作者は感じられたのかもしれない。

泣きに行くつもり余寒の映画館 松井由紀子

NHKのラジオ番組のパーソナリティをされている人工知能研究者 黒川伊保子さんによれば、脳科学では、泣くことで痛みや悲しみを和らげることができることがわかっているとのこと。泣くことにより鎮静作用のある「エンドルフィン」、精神状態を安定させる「セロトニン」という物質が脳内に増えるのだそうです。泣きたい時は思い切り泣くのがよいと黒川さんはおっしゃいます。泣くことは自分に対する理解を深め、自分を解放するひとつの良い手立てになるのかもしれない。暦の上では春になったというものの、まだまだ厳しい寒さが続く頃、確信犯のごとく、泣きに行くつもりで行かれる映画館、一人で観る映画というのもいいものではないでしょうか。

春昼の頬杖に風カフェテラス 野田静香

頬杖の言葉に、藤田嗣治の代表作「カフェ」をふっと思い出しました。今から六年前に開催された「没後五十年 藤田嗣治展」で展示されていた絵の中の一枚です。黒いドレスに身を包んだ女性が、カフェの店内で頬杖をつきながら物思いに耽っている様子。女性の手もには、裏向きに置かれた便

箋。便箋の傍らには赤ワインの入ったグラス。アンニュイな女性の姿がとても印象的な絵でした。

掲句が詠まれている場面は、昼間のカフェテラスですので、とても明るい雰囲気。とは言え、女性が頬杖をつく姿というのは何か物語を感じてしまいます。どなたかを待たれているのか、それともお一人で時間を過ごされているのか、いずれにしても、頬杖にそよぐ春の風に、爽やかな心地よさを感じました。

春耕や今年限りと畝立つる 保坂翔太

二月も終わり三月を迎えるころ、こちらでは畑に積もった雪が融けるころになります。ぼちぼち畑仕事を始める時期になります。まずは畑を耕し、土作り畝作りから。種や苗を植えるまでの大切な仕事です。種や苗を植える場所に土を細長く盛り上げ、畝と栽培を管理するための通路が完成した畑は、とても気持ちの良い姿。そして、種を蒔き、苗を植える日々の畑の世話が始まります。

毎年の楽しみではあるものの、見た目以上に畑仕事は重労働。年々、齢を重ねるたびに、老いていく自分の身体と相談しながらの畑仕事となります。「今年限り」の措辞に、丁寧に日々の生活を営んでいらっしやる作者の姿を見る思いがいたしました。

季  
音  
雪



朱 夏 大橋 廸代

執刀は美男がよろし聖五月  
万緑に嵌めたる御橋廊下かな  
乙女らの髪の毛の多彩や新樹風  
喚声に舞ひたつ砂塵競べ馬  
万緑や馬上の一矢的を割る

余花白し 大村 節代

夏の寺しのび込みたる風雲児  
水子地藏を束子で洗ふ余花白し  
風穴の出口は何処蚊食鳥  
青田風水筒下げた園児行く  
洗鯛はかなき重さ皿に盛る

御縁の音(五円)

小倉倭子

余

花

菊池ひろこ

他愛なく尻尾を絡ませ鯉幟  
捨つる神拾ふ神あり百日草  
かの人の草矢の的になるもよし  
風薫る賽銭箱に御縁の音  
紀ノ川へ飛ばす釣糸鮎めがく

生垣に触れゆく影の夏めけり  
川幅の狭まる音も余花の谷  
「予科練」を伊達に歌ふや余花の風  
鐘の音はうつつかゆめか余花の寺  
新社員名刺サイズの黄金比

春愁 栢尾 さく子

南吹く 五明 昇

春愁を長く曳きずる遠汽笛  
山の水浮力でる頃梅は実に  
永らへて疲れの見ゆる夕牡丹  
雨の夜仔猫啞へて急ぐ猫  
花冷えや過去帳すでに整ひて

葉桜や法衣眩しき修道女  
義に生きし武士の墓風薫る  
百万石の田に白鷺の威を保つ  
吹き募る南風に波乱の骨董市  
元寇かくや対馬を囲む烏賊釣火

朗 朗 の 境 延 昭

柿 若 葉 島 津 初 花

砂丘の駱駝逃水のゆるる中  
春日傘傾げ家庭裁判所  
首夏の花束栄転左遷みな同じ  
烏賊釣火街のネオンは人を呼ぶ  
朗朗の披講に名告風薫る

エンジンを止め緑陰で息を吐く  
柿若葉表裏なき少年よ  
柿若葉小雨の昼はナポリタン  
緑陰や隣町から宣伝カー  
羅や僧の衣に風纏ふ

緑 椎 野 美 代 子

逆 さ 富 士 鈴 木 康 世

新緑に侍る細胞はじけむぞ  
命鮮やか新緑の全身浴  
緑さす鉢のパセリが盛り上がる  
緑さす卷毛生きいきヴィーナス像  
緑の夜背を割つて脱ぐロングドレス

金剛水賜る社風薫る  
緑さす積石だけの無縁塚  
小満の湖に呼応の逆さ富士  
翡翠の補食一瞬彩放つ  
風薫る峠の茶屋のにぎりめし



瀬戸の海 田寺玲子

夏炬燵 鳥羽和風

清水の舞台万緑眼の下に  
行く春や浜に横たふ大錨  
うつし世の末摘花を少女愛で  
耀られてもなほ水はじく鱧の群  
耀り浦はすぐ瀬戸の海風薫る

季語に無きものこそ好けれ夏炬燵  
羅物で京都南座「ほの五番」  
方丈の風より軽き更衣  
蛍見や水を放るる火がふたつ  
紫陽花や刺身分厚き浜の宿

万 緑 十倉和子

再 会 永野史代

万緑の要の天守聳え立つ  
万緑に吸ひ込まれゆく峰行者  
万緑へ飯盒の飯噴き上ぐる  
牛馬童子へお結び一つ万緑下  
主君の墓殉死の墓や緑さす

ひとりしづかししづひとりしづかかな  
闇に眠る山椒魚のしづかなり  
はんざきや我にもありぬ深眠り  
大地よりマグマふつつ別れ霜  
再会はいつも叶はず別れ霜

夏は来ぬ 波多野 寿子

百年物 町野 広子

オルガンで弾いた讚美歌聖五月  
戦中の青春憶ふ麦の秋  
まなうらに秋子の麗姿白菖蒲  
かろやかな靴の音して五月来る  
木々そよぐ庭に出づれば夏は来ぬ

我腕に眠る子猫の軽きこと  
負けん気も一人静に癒さるる  
別れ霜百年物の盆の松  
別れ霜田舎住まひの夜は早寝  
花見果て西へ戻るは我一人

好き嫌ひ 星野 和葉

青 い 茂木 和子

新茶淹れ終の一滴まで楽し  
女三人水仕忘れて洗鯉  
風鎮の重きが嬉し杜若  
蕺草や人に定め的好き嫌ひ  
少子化の進む現今晶子の忌

だうだうと家鴨も通る青田道  
青田道すれ違ふとき土地訛  
溺れさう関東平野の青田波  
青田風さつと私を虜にす  
振り落とす家鴨のしづく照る青田

蛇の目傘 森本早苗

新樹光嫁御収まる蛇の目傘  
万緑や魁夷の白馬はどの辺り  
風薫る港神戸の色乗せて  
緑さす神話の島に夫眠る  
くねる鱧もがく鰈も糶られけり

聖 五月 山中みどり

ピルの上新緑萌ゆる六本木  
焼き立てのクロワッサンや聖五月  
履き初めの白スニーカー風薫る  
女王の矜恃真紅のアマリリス  
看護師の二の腕眩し夏衣

寸 景 柚木治子

春風やなびかす薄き旅衣  
青空ゆそめる吉野の白極む  
秘色てふ巫女の衣裳や新茶式  
ゴッホに似たる麦秋うねる地平線  
母の日よ少年ためらふ花舗の前

海蔵寺界限 網野月を

牧神の笛の音梅花空木かな  
楸や傾ぎて諏訪の神社守  
鎌倉や夏来て井戸の水漉る  
薫風や穢れを洗ふ青瓦  
庭若葉風に季節を定めけり

隠し味 石井喜恵

万 緑 石山かつ子

逃水やシェフの明かさぬ隠し味  
芝桜ぐるりと廻す万華鏡  
抜け道のここが出口か別れ霜  
一人静雨の訣れとなりけり  
香水の壇は空っぽ姫鏡台

ひとごゑのとどかぬ高さ街薄暑  
拭き痩せの格子戸京の路地薄暑  
羽抜烏朗朗と刻告げにけり  
民俗のアイヌ神呼ぶ踊唄  
白無垢や万緑の風総身に

新茶汲む 井上燈女

良き事は近くにありて新茶汲む  
燈台の白く浮き立つ青岬  
病葉や御朱印帳の半開き  
畦塗つて遠くが光る千枚田  
腰落し膝を濡らせし草刈女

☆

☆

# 季音月

初夏の風 松宮保人

初夏や合せ鏡に頷きぬ  
土器の舞ふ頂上や初夏の風  
切株に腰を預けて初夏の風  
緑蔭の瀬音閑かや大本山  
緑蔭や式部の筆を執りし跡

夏めく 大場順子

夏めくや合せ鏡に海の青  
母の日や母在りし日の文の束  
筍をむけば輝く童子仏  
白鷺の切り絵の如く羽ばたけり  
白鷺の舞のましろに往生院

まなざし凜と 梅澤佐江

すれちがふ線香の香や春日傘  
むらさきに木曾路けぶるや余花の雨  
つづら屋の漆の匂ひ路地薄暑  
公達の盛衰秘むる山若葉  
まなざし凜と若葉明かりの弓道場

象の鼻 荒井俱子

新茶酌む人形焼はほさつ顔  
葉桜や詰襟さまになつて来し  
卯浪立つ海神が守る漁師町  
遠流とは重き言葉や烏賊火燃ゆ  
薫風や宙をまさぐる象の鼻

四つ這ひ 近藤徹平

四つ這ひに渡る丸太や水温む  
内堀のジョガー振り向く春日傘  
蟬時雨未完の昭和報告書  
裏木戸や束の間に張る蜘蛛の網  
聳え立つ白衣観音薄暑光

夏めく

高島寛治

逃水に入りて溶けゆくバスの列  
夏めくや豊の匂ふ奥座敷  
母の日や利根大堰は満満と  
大南風海を見下ろすレストラン  
鳥巢立つ長き梯子を折り畳む

旅心

正木萬蝶

シテ島より旅はじまりぬ聖五月  
想ひ出を紡ぐや余花に辿り着く  
うすくれなゐの余花に見えむ宇陀や初瀬  
入相の空白鷺の茜色  
姨捨や雨後のはんざき清らなり

草笛

松井由紀子

草笛は別れの合図夕茜  
草笛や征きしまなる子のむかし  
草笛や音のあやふき流行歌  
草笛のとぎれとぎれや風の里  
梅雨催ひの夜風重たき別れかな

抜衣紋

丸山マシミ

忘れ霜門跡寺の石畳  
逃げ水を追うて湧き来る旅心  
一座束ぬる寡黙の長や白舁  
湧き水に麦茶の葉缶峠茶屋  
五月場所枳席の華抜衣紋

燕の子

福田千春

はんざきの太れば稚の太る村  
ひつそりと余花ひつそりと狩の道  
余花に会ふ月命日の庫裏の裏  
口開けて目葉さすや燕の子  
独り居の父の強がり露を煮る

柿若葉

森川義子

古りし家をやさしく包む柿若葉  
屋敷稲荷の辺り一面落茂る  
帽子屋に友と立寄り街薄暑  
また小さくなりたる影や春日傘  
はるかなる昭和が香る豆の飯

若葉の息吹

井上 玲子

満身に若葉の息吹富士樹海  
今生の若葉の風に身をゆだね  
蓑笠を吊す落柿舎雨蛙  
灯ともり雨や高鳴く雨蛙  
残雪の解けて秩父嶺群青に

六月の森

池田 雅夫

六月の森馨しき故山かな  
曇り空溪蒸の色を哀しめり  
緑蔭に吸ひ寄せらるる放浪者  
あぢさゐの彩り雨に委ねけり  
君がため薔薇一輪を剪らねばや

棕櫚の花

内田 恵子

どこからか獣の匂ひ椎の花  
棕櫚の花接骨院へ坂上る  
卯月波砂浜駆くる女騎手  
洗鯉鉄道員の叔父料る  
逃水や少年夢を追ひかけて

小運動会

渡辺 舍人

小運動会万歩計提げお祖父さん  
葉桜や二人の径となる校路  
大社殿紫躑躅白躑躅  
恋知らず席替したく六月来  
勉強児に頸の深溝桜桃の実

柿若葉

大塚 茂子

ミシン踏む明るき窓辺柿若葉  
新緑の三四郎池水青し  
山の子の誰か鈴音山法師  
十薬や歩けころぶな根は強し  
花桐や無心に写経始めたり

青葉潮

上戸 千津子

薫風に藁葺き御門威を放つ  
忘れ難き故郷へ続く青葉潮  
夏めくや開くる楽しみ箱御膳  
万緑を浴びて跳ぬるやスニーカー  
五月晴水飛ばしつつ糶の声

秩父路 野口和子

夏めくやいつも冷たき足の先  
峠越ゆれば秩父路へ桐の花  
竹皮を脱ぐ痴漢注意と立て看板  
真直ぐに生きる不器用燕子花  
薔薇匂ふ満席となる喫茶店

黄金の器 山田美佐尾

窓をあけ甘い香りの若葉かな  
若葉風参道をゆく二人づれ  
武者人形と太刀は健在百年目  
抜けぬ太刀抜きてみしようぞ武者人形  
陳列の黄金の器 五月晴

雨蛙 熊倉千重子

麦熟れてしづかなる村光りをり  
マネキンはなべて細身よ夏めけり  
高層のビルを遥かに雨蛙  
絆纏の色に誘はれ買ふ新茶  
実験室の融くる臭や夕薄暑

卯波立つ 川崎道子

急行の車窓一面麦の秋  
水切りの小石を探す麦の秋  
五月闇帰りたいとて泣く蘇鉄  
夜行便のトラックが着く五月闇  
国生みの島に真つ向卯波立つ

更衣 松山清子

青葉風万歩あるいて楽しめり  
ちんちんと都電の発車風薫る  
葉桜の風の暗さの土手に佇つ  
ガスタンク三基ある町薄暑光  
教室のぱつと明るく更衣

柿若葉 西浦千枝子

感触は嬰のほつぺや柿若葉  
深緑が山褰うむる神の山  
ドライブや深緑の山絵画めく  
花曇りためらひもなくシルバークー  
さつき咲く丘真向ひに子の新居



逃水 日高道を

逃水や旅の続きの日本海  
月朧酔へば艶めく女形  
名脇役と言はれて久し雪柳  
散る桜人に黄昏あるやうに  
風流を地で行くをとこ荷風の忌

風青し 青木鶴城

風青しサンドウイツチをさくと切る  
麦の秋一両だけの電車過ぐ  
湯上がりの軽き立て膝夏衣  
古伊万里に藁焼きの香初鱈  
袋角失くしてならぬ權威かな

春の京 檜鼻ことは

春風や鴨の河原の緋毛氈  
嵐電に揺られ嵯峨野や目借時  
帷子の辻と言ふ駅花霞  
しなやかな筆の品書き初桜  
桂川渡りて茶屋の桜餅

幸せ色 飛永鼓

緑蔭の一睡が良し農良仕事  
やはらかな息をしてをり緑蔭に  
要点を言はず語らず緑蔭に  
羅や幸せ色を翻し  
羅やたつた一人に見せたくて

病葉 原田秀子

病葉や一病を得て知る風情  
病葉の揺蕩ふひと葉何処ゆく  
病葉や水神祀る過疎の村  
琉金に聴かせてみたき円舞曲  
ツンとして心通はぬ金魚かな

☆ ☆

# 季音花

夏来る 石川理恵

行く春や二人つきりの句会閉づ  
と見かう見して白鷺は風に立つ  
白鷺立つ黄門さまの庭園に  
異国語に囲まれてをり薔薇の園  
初めてのコーラを飲む子夏来る

風の道 野田静香

露の葉の重なり合うて風の道  
やまびこの輪唱弾む愛鳥日  
遠目にも丘は紫桐の花  
客船の離るる島やサングラス  
ころころと笑ふ少女の手にラムネ

若葉のころほひ 河野はるみ

「清正の井戸」こんこんと羊朶若葉  
藤若葉房の容に垂るるや  
造成地の余花に見惚るる説明会  
姉住まふ長寿の島より新じやが来  
黄昏の逢瀬束の間蛍の夜

青しぐれ 曲淵徹雄

立話のつきぬ路地裏雪柳  
逃水の揺蕩うてゐる九段坂  
草生ゆる主なき古墳春深し  
街灯をまさぐる枝葉夏きざす  
開墾に龍の伝説青しぐれ

妙高 横山君夫

ふるさとは水田の匂ひ夏めきぬ  
峰白きままに妙高夏に入る  
満開の役場のさつき復職す  
太陽の香りも詰めて新茶着く  
緑蔭や白き制服車座に

一 苾二葉

保坂 翔太

袋帯の似合ふ金髪春日傘  
半年ぶりに帰る船乗り遅桜  
安産の英文の絵馬緑立つ  
「一苾二葉」を学ぶ学童一番茶  
暮れ残る山を下るや茶摘籠

開山堂

染谷 風子

春風やモンローウオーク大胆に  
艶やかや蒼天映す春の水  
方三間の開山堂に若葉風  
麦秋や三本立てに原節子  
路地奥に小唄の稽古夏の雨

黄色い声

石田 慶子

余花一樹土産のマフィン友の笑み  
理屈っぽい君のうんちく余花の宿  
黄色い声の真ん中にある山椒魚  
夏初め絵手紙で来るメッセージ  
五分刈りの君の白い歯アロハシャツ

青葉潮

笹本 啓子

卯の花や農を継ぐ子の逞しき  
手に馴染む万古の急須新茶汲む  
風薫る山の駅舎はログハウス  
遠卯波湾岸走るスポーツカー  
青葉潮沖の船団見え隠れ

五月病

渋谷 きいち

武具飾り太刀振り回す親子かな  
三姉妹庭三本に桐の花  
過疎村の休耕田に桐の花  
酔客の路地の遠吠え夏の月  
列車通過す五月病かも夏帽子

一番茶

下川 光子

全身の萌黄に染まる一番茶  
逃水やペットボトルは空つぽに  
吹奏楽部ぶかぶかどんと夏に入る  
夏つばめ無限の空に幾何模様  
パンプスを嫌がる足や薄暑光

面映ゆし 宮崎チアキ

薄紅の春日傘たり面映ゆし  
お点前の耳に囁野点かな  
束の間のミニ庭園やバラ薫る  
融然とひととき過ごす薔薇の園  
濃さも淡きも共に閃くポピー畑

駅ピアノ 野村美子

歌舞伎座へ白大島を春日傘  
駅ピアノ風に流れて夕薄暑  
岩礁にはりつく貝や青葉潮  
山間の谷のせせらぎ山うつぎ  
卯の花やダム湖の青を風渡る

夜遊び 松島寛久

夜遊びの子ら泥顔に螢狩り  
緑蔭のベンチに土工どか弁食ふ  
初夏の雨幼馴染の離檀かな  
老い行きて羅漢に似たり初夏の僧  
冥界の子らの化身や螢狩り

すだれ 田中章嘉

竹簾節の模様は幾何模様  
初恋の月も恥ぢらふ簾越し  
振り返る想ひ出今にすだれかな  
瀬戸内の小島の泉神宿る  
雨雲を泉に映し足速め

夏きざす 鈴木玲子

瑠璃草のゑくほ並びし理容店  
夕陽さす躑躅さらなる緋の色に  
恵まれし体躯レガッタ快走す  
寄する波へと花いちもんめ夏きざす  
赤子のごとはんざきの手のぶくぶくと

青葉潮 野平美紗子

五月晴れ明るい心で古里へ  
青葉潮はるかに望む中田島  
蚕豆の莢剥く時の楽しさよ  
夫逝きても前庭華やか牡丹咲く  
夕焼け雲赤く染まつた水芭蕉

万 緑 高橋 満耶子

万緑や六道めぐる六地藏  
山火事ぞ百万本の緋のつつじ  
待ちかねて原付免許若葉風  
初バイトは単車の資金若葉風  
背番号を「大谷の日」に聖五月

でんでん虫 瀬戸 雄二郎

かたつむり戦ひもせず逃げもせず  
かたつむり歩いた距離が生きた距離  
泣き虫の子がかたつむり捕りてきし  
門柱のでで虫に先づ迎へられ  
でんでん虫ひねもす見たる暇人よ

風 薫る 葛城 千世子

子供の日体操服の鼓笛隊  
起きぬけのシャワー必須の十五歳  
早朝の補習登校風薫る  
万緑や押ししたる逆さ太鼓判  
梵妻の別れの言葉花卯木

夜半の夏 梅澤 輝翠

舟屋から轟く拍手青葉潮  
尼御前の見事に咲かす花卯木  
千枚田青さ浮き立つ青嵐  
古代史の謎を読み解く夜半の夏  
新茶汲み白磁に落とすひすい色

疵 へ 越田 栄子

斎場に淡雪のごと山法師  
カーネーション白の寂しさピンク買ふ  
母の日や料理上手は受け継げず  
母の日の夕星ふつと火照りけり  
点と点結ぶ縁や夏の星

万緑の季 寺内 洋子

葉桜となり静もれる吉野いま  
万緑も岩崩落の跡消せず  
初夏やつるりと剥けしゆでたまご  
万緑をつなぐ吊り橋揺るふはり  
納骨堂の灯のやはらかや五月闇

花の香りに 西幅 公子

青潮の勢の魚群待つ漁師  
卯の花の香りに弾む朝の沼  
歩荷ゆく白き群生水芭蕉  
放射状にすいれんの花天仰ぐ  
卯の花のこぼれを受くる鯉の口

風薫る 森 和子

薫風や鳶職人の歩く空  
「あらよーつと」車夫の掛け声風薫る  
風薫る手縫の小物売るワゴン  
薫風や孫のやうなる研修医  
ペットボトルを遊ばせてゐる卯波かな

夏 山戸 美子

窓を開ければ通り抜けるや草いさ  
新茶汲み写真の父に語る母  
駿河より現役時の新茶かな  
多言語の飛び交ふ夏や通天閣  
死角より琥珀の梅酒見つけをり

雲の峰 綿貫 ひさの

夏の朝筋トレ仲間遅刻なし  
耳の中何か音する夏の夜  
何気なく心さわぐや雲の峰  
忘れしままの鏡台奥の香水瓶  
草取りのちよつとが何時か赤き空

❖ 原稿募集

季 音 (雪・月・花) 五句 (巻末添付用紙)

水明集 五句 ( )

山紫集 一句 ( )

鼓笛集 三句 (編集部より依頼のあった方)

水明通信・随筆等自由にお送り下さい。

原稿締切 毎月二十五日必着

原稿宛先 水明俳句会 編集部

〒330-0064 さいたま市浦和区岸町四一〇―二一

# 『水明誌』を繙く（水明五月号）

杉本青三郎（埼玉県現代俳句協会会長）

野に遊びつくして替はる影の向き 山本鬼之介

山本健吉に「時間性の抹殺」という俳論がある。「極言すれば、俳句は音数の長さを持たぬ詩なのだ。三十一音が十七音となるまでの間に、時間性の抹殺という暴力的飛躍が遂行されたのだ。それはもはや、時間の法則に従わぬということ、存在様式としての時間性を有せぬということ：（以下省略）」として、俳句は一瞬のことを詠む詩であると言っている。

これに対して主宰の作品は、半日程度の時間の経過があつて成立する作品であり、俳句としては幾分稀な作品であるとも言える。また、小林一茶の「雪とけて村一ぱいの子ども哉」にも通じる、春が来たことへの喜びに満ちている作品でもある。日の光の向きが替り、影の向きが替るまで、子供たちが（親たちと一緒に）、一心不乱に野遊びを遊びつくすことのできる時間は、コロナにおける数年の拘束・蟄居期間を経て、普通の生活が普通にできることの大切さを、ようやくのことに味わうことのできた至福の時間なのである。

巡礼幟立てば総立ちつくしんぼ 十倉和子

土筆の句で個人的に好きな作品は「約束の寒の土筆を煮て下さい」（川端茅舎）、「せせらぎや駆けだしさうに土筆生ふ」（秋元不死男）であるが、この作品はもっとユニークである。

巡礼幟からは、大相撲の力士の名が書いてあるカラフルな幟を真っ先に想起する。春巡業の時の一齣なのかもしれない。これが一つの景であり、もう一つの景として、ランダムに夥しく生えてきている土筆の群である。

しかも、一句の切れは、「巡礼幟」「立てば」「総立ち」の三パターンで切ることができる。「巡礼幟」か「立てば」で切れば、総立ちしているのは土筆であり、「総立ち」で巡礼幟が立つ頃には、土筆がこれ見よがしに生えてくる。後者で読めば、総立ちに立っている巡礼幟を、つくしが感慨深く眺めているともとれる。何方で読んでも面白い。これは二つの「立つ」が意味の上でも句の流れの上でも呼応しているようにも思えるのであり、「総立ち」という言葉の勢いが、作品に春の勢いをも与えている。

# 現代俳句鑑賞

網野月を

海へ開く日傘どこへも飛べさうで

伊藤政美

〔俳句界〕5月号・新作巻頭より〕

上五の「海へ開く日傘」の具象と作者の動作が句の主幹である。句の後半は口語調であり、作者の心持を物語っている。「どこへも飛べ」る訳はないのだが、開放的な気分を醸し出している。作者自身が自らに言い聞かせているようだ。

少しだけ棺あいてる薄暑かな

山口木浦木

〔俳句界〕5月号・曲がり角より〕

一読、シュールレアリスム的な雰囲気を感じ取るのだが、実景なのである。「棺」の文字を目にして読者は身体を硬く強張らせるのである。他に「思い出の夏がとび出す曲がり角」がある。

デモ防禦隊整列夏来る

橋本榮治

〔俳句〕5月号・結社歳時記より〕

一九六〇年六月十五日の安保闘争を想起する。上五中七の字足らずのリズム感が硬質な「防禦隊」の姿様を叙しているようだ。現代日本がまだ若かった頃の話である。私事ではあ

るが、筆者は母の胎内にあってデモに参加している。母は臨月であった。

流水の鷗病母の眼で見つむ

津高里永子

〔俳句〕5月号・流水より〕

先ずは「病母」の措辞が読者を捉える。経緯や理由は分からない。病の母親が流水を見に行っているのである。春とは言えまだまだ寒さの残っている季節に病をおしての旅なのである。接岸した「流水」に翻弄された「鷗」と「病母」の視線に同質のものを感ずる。

金雀枝やスタジオ古りし写真館

井上弘美

〔俳句四季〕5月号・季語を詠むより〕

植栽されているのか、活かしてあるのか、兎も角、「金雀枝」を置く所としてこんなにも相応しい空間はないだろう。あの黄色はどことなくノスタルジックな光の加減に関係づけられている。上五の切れ字「：や」でいったんリズムを切っているが、季語と句意の取り合わせと解するよりは、その空間に「金雀枝」を置いた方が良いかと思う。



## 金雀枝は至上の恋の宿る花

〔俳句四季〕 5月号・季語を詠むより

山本鬼之介

イングランド王ヘンリー二世に始まるプランタジネット王朝の王妃、アリエノール・ダキテーヌを惹起した。「至上の恋」とは、やはりロイヤルであることが命題なのではないだろうか。高イングランドの草原に咲きこぼれる金雀枝は髪飾りとなる。物語の世界に誘ってくれる句である。

## 苺摘むショートケーキの額より

〔俳句四季〕 5月号・舌に雨より

西生ゆかり

「苺摘」みなのであるが、果樹畑ではなく「ショートケーキ」から摘んだのである。洒落ているというか、機転が効いている。加えて、「ケーキの額」からである。ダメ押しに遣られてしまった。他に「五月生まれ言葉育ちや舌に雨」がある。

## 凍雲が君の乳房を模倣する

〔俳句四季〕 5月号・雲は美しかったのかより

今泉康弘

こんなにも「凍雲」というものは美しかったのか、と驚愕し不明を恥じて、気づきの遅かったことを後悔さえしている。「君の乳房」は作者の最上級の価値を表現していると解した。

## 復活祭桐箱入りのかすていら

〔俳句四季〕 5月号・夕燕より

佐々木潤子

特上品のカステラを召し上がっているのであろう。到来ものなのかどうかは分からないのだが、何やら特別な感じのす

るものである。上五の季語「復活祭」と微妙な関係性を有していて、響き合うものがある。日本人にとってはどちらも外来のものであり、歴史的にも同じ時代に日本に紹介されたものなのであるまいか。取合せの句の面白さを堪能させてくれている。他に「三輪車並ぶマンシヨン夕燕」がある。

## 吐く息を双手囲ひに梅早し

〔俳壇〕 5月号・事八日より

雨宮きぬよ

双手を顔先に持つてきて息をゆつくりと吹きかけている所作である。いくばくかの暖を取るために息を指先に吹きかけるのだが、表現は「吐く息を」慈しむように「双手」で守っている。冬の季語「梅早し」が抜群に効いている。

## 蝶の眼にまた噴き上がる桜島

〔俳壇〕 5月号・水の美貌より

高岡 修

この作家が「蝶」を言う時の象徴性は何処にあるのだろうか。鹿児島市内の仙巖園での吟行句である。もとは磯庭園と称して、藩主の別荘であつたらしい。錦江湾に面して借景に桜島を望んでいる。「蝶」は篤姫こと天璋院の化身であつたらうか。他に「昔日の水の美貌へ流しびな」がある。

## もう声の届かぬ高さ鳥帰る

〔俳壇〕 5月号・春雷より

犬飼孝昌

北帰行の鳥たちを見送る作者がいる。声の届かぬ高さまで見送っているのだ。たぶん作者は見えなくなるまでその点点を見つづけていたであらう。他に「余生にあらざ世の端を耕して」がある。

# 自選二十句

梅澤輝翠

大寒の飛行機雲の鋒よ  
蜷汁口わらぬ奴二つ三つ  
天守なき石垣なぞり青き踏む  
北限の馬の蹄に春の草  
花冷えの外階段のハイヒール  
春眠や校舎の窓の飛ぶカーテン  
のどけしや土手の空ゆく雲ぼつと  
夏帯の根付の般若幅きかす  
塩竈の火を焚く男鰯雲

鬼灯の網目の中の宇宙かな  
鶏頭は貰はれて行く満月に  
望月に舟を出したり鱗雲  
車長持庭に引き出す秋土用  
武蔵緋の機織の音も秋の声  
秋深む漆塗る刷毛固まりぬ  
魚河岸に四代目あり鷹の舞ふ  
老舗の庭の狭くなりしも冬桜  
のら猫に幾多の名あり日向ぼこ  
被災地のがれきの中の福寿草  
早暁の凍雲の海夢捨てず

## 「これからは言葉探しの旅へ」

### 網野月を

氏の作品を総括すると、逆説的ではあるが把握しきれない総体の広がり、内容的には出会ったことのない渾沌を感じるのである。広がりとは大きさではなく広がりゆく運動性である。渾沌とは、筆者が整理つかない程のもので、これもまた運動性を有して、決して暗闇ではなく光明にたどり着く霧中のようなものである。つまりは、説明のつかないタイプの作家、今まで筆者が出会ったことの無いタイプの作家であり、まだまだ総体が現れているとは思えず、これからも注目し続けたい作家なのである。一方でいま将にご自身の世界を創っている最中の作家であることは確信をもって言うことが出来る。

そう考えるとこれから氏の創作の世界がどのような変化を示してくれるのかという楽しみが出来る。変化するためには、今までの環境の外にも目を向ける必要性に迫られるであろう。これまではご自身の生活圏・経験の歴史の中で、探し物をしている風であったが、水明賞を受賞することで、好むと好まざるとに拘わらず、言葉探しの旅に出掛けることになったと言って良いだろう。その旅で蒐集した言葉の標本Ⅱサンプル

のあれこれを用いて、如何に精神世界を構築し拡充し、展開してゆくのか、見守らせて頂きたいと思っているのである。実に楽しみなのである。  
次に五月号に掲載の受賞対象句抄の中から二句を鑑賞したいと思う。

#### 日本の団扇の風に眠る稚

上五の「日本の」がこの句の肝である。句意としては、決して難しいことは無いのであるが、「日本の団扇」と句跨りに読み続けられない。上五の「……」で軽い切れがあることを意識することが大切である。

#### 手開きの鯛の骨の美しき

料理好きな氏、ならではの句である。座五の「美しき」に込められた意味は、単に見た目の美しさだけを言っているのではない。掌に収まっている「鯛」への愛情のようなもので感じさせてくれる。

次のこれまでの氏の秀作を挙げる

#### 鶏頭は貰はれて行く満月に

#### 望月に舟を出したり鯛雲

#### 花冷えの外階段のハイヒール

#### 蜆汁口わらぬ奴二つ三つ

#### 大寒の飛行機雲の鋒よ

第一句目は、満月の夜に鶏頭の花束を貰って帰る人がいるということである。中七の受動表現によって、「満月に」が時空間の指定ではなくて行動の主体のように読める。帰る人

にしる「満月」にしるる作中に主体を見出すことが出来る。第二句は夜空に浮かぶ鰯雲を活写している。澄んだ秋の大気の中で月光に照らし出された雲の象形が目に見えようである。漁師に模した天空の星座が、鰯漁に舟を漕ぎ出すようである。第三句目は、中七座五の響きの硬質さと艶のコラボレーションを季語の「花冷え」が補填しているという形である。響きの硬質さは、句意でもあり音韻でもある。第四句目は、赤みそ汁に見え隠れする「二つ三つ」の蛸が良い。日常茶飯のこともあり、深読みも出来る内容を秘めている。第五句目の座五は何と読むのだろう。「ほこさき」とも読めるが「きつさき」と読みたいところである。大寒の午前中の晴れわたった空を想像した。

何れの五句も濃密な句意を旨としているのだが、それらの句意は句中の語彙の関係性の稠密さから引き出されている。選びぬかれた語彙の表象性の微妙な重なり合いが糊しろとなつて句全体の構造を堅牢なものとして、且つ関係性を担保しているのである。

次の氏のこれまでの代表句といつてよいだろう句を挙げさせていた。自選二十句にも掲出されているものである。

天守なき石垣なぞり青き踏む  
夏帯の根付の般若幅さかす  
車長持庭に引き出す秋土用  
武蔵緋の機織の音も秋の声  
秋深む漆塗る刷毛固まりぬ  
魚河岸に四代目あり鷹の舞ふ  
老舗の庭の狭くなりしも冬桜

鬼灯の網目の中の宇宙かな  
のら猫に幾多の名あり日向ぼこ

こちらも秀句揃いである。掲出の九句から氏の世界の広さを感じ取ってもらえるのではないだろうか。「天守」は旅路の句、「夏帯」は日常の句、「車長持」は故郷実家を彷彿とさせる句、「武蔵緋」は作者の聴覚の句、そして「刷毛」は視覚の句、「魚河岸」は作者が情報として捉える句、「老舗」は回顧と現在を取り込んだ句などである。

「鬼灯」のような世界観を表出する句もある一方で、「のら猫」のような飄逸とした句も見出すことが出来る。初めに述べた氏の世界の拡がりを見せていると言つて良いだろう。最後に思い出深い氏の句、二句を挙げてみたい。

唐辛子地蔵のべべと競ふ赤  
敬老日漁師の背広座りを

前句は赤赤とした景が叙されている。上五の季語「唐辛子」は眼前に在るのであるが、「地蔵」も視界の中にあるように思われる。次句はあるひとりの漁翁の「敬老日」の様子を活写している。尊敬と親愛あふれるものであるが、少しばかりの滑稽とペーソスが滲み出ている。

今現在の氏の句作りを拝見すると、誰かもしくは作者が介在する句作りが得意なように思う。また句中に作者以外の別人格を主体として構成する手法も見られる。昨今流行の「作中主体」の手法である。氏の作法の工夫は天性のものであつて、決して意図している様には思われぬ。それよりもこれからは言葉探しの旅へ赴いて欲しいものである。

## 自選二十句

越田栄子

丹精のおぼろ豆腐や梅真白  
街並の風情を保つ春の雪  
鴨引くや風にリズムの生れし日に  
日の匂ひそつとたたみぬ春日傘  
菜園の畝にさしたる風車  
小走りで合はす歩調よ夏帽子  
御飯屋に祇園柱の立ちて夏  
センサ一の感度抜群雨蛙  
形代の燃えて天へと帰りゆく

文机の窓辺に果つる法師蟬  
忍城の歴史を今に水の秋  
風に香を里に野菊の盛りなり  
稲掛けて我が故郷の景となる  
有明の空の清しき今朝の冬  
柏手に簪揺るる小春かな  
水鳥や川面に光遊ばせて  
体内にミクロの戦士冬銀河  
山眠る未知なる力蓄へつ  
まだ色を持たぬ波音初日待つ  
初暦めくれば未来動き出す

## 熱い熊谷句会のマドンナ

近藤徹平

「暑い熊谷に熱い俳句を」の旗印を掲げ平成二十五年四月に熊谷句会が発足した。今や小林萬二郎さん、加藤草太郎さんがすでに鬼籍に入り、発起人の福田藤十郎君は闘病中なので、越田栄子さんと私が発足時から残っている会員となった。

雪しんしん母似の遺影にとめでなく

風薫る白いドレスを身にまどひ

茶の花や母と歩いてみたき径

S Lの汽笛響くや花堤

栄子さんの御母堂は既に他界されているが、その直近の叔母が故横田さだ子さん、その次の叔母が森千代子さんで、いずれも水明会員であった。第一句は末の叔母が亡くなられたときに千代子さんの指導の下で栄子さんが初めて詠んだ句。

第二句は発足間もない第二回熊谷句会で栄子さんが詠んだ句

である。栄子さんは当初から句会の裏方を務められているが、当時の男性会員は私を始め作法を知らない初心者が大半で、この句を作者の結婚の句と錯覚して、失礼な言葉をかけた恥ずかしい記憶がある。御長女の結婚式の句と分かってそれ以来私は頭が上がらない。第三句は熊谷句会創立五周年記念を機に句会独自に発刊した句集「熊草堂」で、栄子さんの章に載る標題句である。早く御母堂に死別した人には格別の思いがある筈。折しもその平成三十年三月三十一日本部の吟行会が熊谷で開催された。当日は土手の桜と菜の花が同時に満開となり、参加された水明会員から絶賛されたと自負している。第四句は栄子さんがこの時特選の栄に浴した句。折から秩父鉄道の蒸気機関車の汽笛が満開を祝っているようであった。

御仮屋の祇園柱の立ちて夏

忍城の歴史を今に水の秋

形代の燃えて天へと帰りゆく

稲掛けてわが故郷の景となる

春光の小川さざめく和紙の里

菜園の畝にさしたる風車

ランナーの追風となれ木枯よ

栄子さんの出生地は比企郡小川町、御夫君と結婚したのを契機に熊谷市に家庭を築いている。この土地柄が栄子さんの秀句を生み出している。第一句は熊谷市のうちわ祭を詠んだ句。この起源は古来寺社ごとに行われていた祭を十八世紀に



町民が願ひ出て関係地域が一体となった祭に發展させ、その後市の發展と共に参加地域を広げた伝統を持ち、現在は八坂神社の夏祭として八地域の山車・屋台が参加する祭で、地元は関東一と豪語する。第二句は豊臣秀吉が石田三成に命じて北条方の忍城を天正十八（一五九〇）年水攻めで攻略させたが、忍城の主力が小田原北条籠城戦に割かれていたにも関わらず、小田原落城まで持ち堪えたという史実に基づいた句。秀吉は備中高山城を水攻めで開城させたが、忍城と高山城では水理學上、地形上等の条件が異なり、忍城を短期間に陥落させるには無理があったと私は考える。第三句、形代の風習は近年少なくなつたが、小川町八幡神社で形代を焚き上げている景を詠んだ句。第四句は刈り取つた稲の束を稲架に架ける風習が未だ残っている景を詠んだ句。第五句は小川町の和紙の里を水明の吟行で訪れたのを思い出させる句。第六句、熊谷周辺には日曜菜園が多いが、土竜退治の目的でペットボトルを改造した風車が取囲んで一斉に回っている景。第七句、冬風の代表として木枯しを詠んだ句。埼玉県北部から群馬県にかけて生活は冬風に支配される。自転車通学生は向い風であれば自転車を押して登校しなければならぬが、追風ならば自転車を漕がなくても楽に通学できる。だが下校時には全く条件が逆転する。追風になれば生活者の実感。

### 小走りでは合はず歩調よ夏帽子

妙薬や夫の指南の玉子酒  
衣桁には四つ身の晴れ着小春かな  
柏手に簪揺るる小春かな

栄子さんは銀行員時代にサークル活動でご夫君と知り合い、栄子さんの御母堂逝去の報を聞きつけたご夫君がお悔みに駆け付けたのが契機で結婚に至つた由。第一句は颯爽と歩くご夫君に歩調を合わせる栄子さんを想像。第二句は玉子酒の味加減をご夫君にお願ひする栄子さんの謀。第三句は初孫の晴れ着を一家で愛でる景。第四句は孫娘の簪が柏手に揺れる景。

街並みの風情を保つ春の雪

センサーの感度抜群雨蛙

体内にミクロの戦士冬銀河

山眠る未知なる力蓄へつ

初曆めくれば未来動き出す

大空に起筆の一字竹の秋

栄子さんの句には一語で句の肝を表す鋭さがある。第一句の風情を保つで古都を、第二句は雨蛙に近代科学のセンサーを対比、第三句はミクロの戦士でキラー細胞を、第四句は未知なる力で来たる春を迎える大自然の営力を、第五句は未来動き出すで新年を、第六句の起筆で手中に大空を取込む等である。栄子さんが水明句会雪欄の叔母御を継ぎつつ、熱い熊谷句会を支え、なお一層活躍されんことを期待してやまない。

# 俳誌望見 染谷風子

「春燈」二〇二四年三月号 通巻九二八号

主宰 鈴木直充 発行所 東京都墨田区

昭和二十一年一月、主宰久保田万太郎、発行人大町紘、編集人安住敦として、東京都麻布区霞町で創刊。「家常に根ざした抒情句を詠む」をモットーとしている。

「春燈」は、創刊以来、同人制は敷かず、作品発表は主要作家による自選欄「燈下集」と主宰選の「当月集」及び「春燈の句」に区分される。まず、「燈下集」より十句抽出。

双眼に臆さぬひかり漱石忌

名譽主宰 安立 公彦

風呂場より洩れくる湯の香枯木屋

主宰 鈴木 直充

鈍りたる五体を沈め冬至の湯

西川 保子

初夢の当りまことか宝くじ

園部 露郷

いまさらの愚痴笑ふべしおでん酒

松橋 利雄

開戦日珈琲熱く熱く入れ

三宅 文子

手袋のままの別れの握手かな

林 紀夫

句読点ただしく打ちて聖夜かな

栗原 完爾

宛先は天国ばかり賀状書く

川崎真樹子

薬罐酒回して仕事納かな

中島 美冬

いづれも豊かな抒情句である。一句目、上五中七は漱石

の『吾輩は猫である』の猫の眼か。反俗の正義感が人間界の愚を冷徹に批判している。二句目、まさに「家常に根ざした抒情の句」だ。枯木屋の寒気と湯の香の温みの取合せに日常の美を感じる。三句目、高齢の体を柚湯に沈める至福の一時。五句目、「酒は涙か溜息か」の一人酒は若い時の酒。人生経験を積んだ人間には片意地はらぬおでん酒が一番である。六句目、「熱く熱く」の重ね詞の奥に作者の深い想いが窺える。八句目、句読点、特に読点の打ち方は難しい。それが文の良否を決定するからだ。物事の肝所を押えることは、人生にも社会にも通じる。「聖夜」との取合せは意味深い。九句目、鬼籍に入った友人知人が増えた作者の長嘆が聞こえる。十句目、下町の町工場の人情味溢れる仕事納の景が鮮明である。「当月集」より共鳴句五句。

担がれて信号を待つ 聖樹かな 阿知波公子

欄外にはみ出すメモや十二月 平野 浚次

柚子二つ湯舟にありて子との距離 立 竹人

鶴嘴でシベリア凍土打ちし義父 齋藤 泰子

ソクラテスの妻ほどでなし空風 大関 博美

四句目、シベリア抑留では六〇万人が強制労働に従事させられ、六万人が死亡した。我々はこの事実を忘れてはならない。五句目、諧謔の句、作者は夫想いの方と推測する。

私は安住敦著『俳句への招待』の「花鳥とともに作者が居風景のうしろに作者がいなければつまらない」の言葉に感銘し、以来指標としている。「春燈」の発展を祈念致します。

山本鬼之介 選

水明集

春の野やフォークダンスの高齡者  
名店街そぞろ歩きや春の夕  
奥飛驒に華やぎ添ふる遅桜  
強面の忠義面して義士祭へ  
「明治村」訪ねし折も遅桜

さいたま 清水桂子

春の野に音色添へたる水車かな  
店番に寡黙なオウム四月馬鹿  
法螺の音の響動む三山遅桜  
お百度の磴のぬくもり遅桜  
花散るや標本木へ御礼肥

伊奈 菅原卓郎

遠足の輪唱の列見え隠れ  
遠足の値切り買ひたる万華鏡  
挙りたる加賀の名園緑立つ  
遠足の腕白揺らすかづら橋  
点滴を見上ぐる先に朧月

さいたま 新 曆文

夏近し青海波透く薄造り  
潮入の池の水門夏近し  
大方は背広にリユック春の朝  
春の暮沖より届く碇泊灯  
炎浮くコンビナートや春の月

岡田宣子

雑踏抜けヒールこつこつ春の月  
稜線をやや朱を帯ぶる春の月  
揺れながら空と交信春の草  
春霞空に溶けゆく相模灘  
記念日にひな菊の束胸に抱く

菅原真理

白雲の流るる方へ水草生ふ  
円き山のこそばゆきかな草若葉  
潮の香の弥増す昼餉磯祭  
聖帝の国見の丘や春霞  
酒屋や枺に塩盛る粋な人

小林京子

春雷や水草揺れて泡ひとつ

無住寺へ続く足跡斑雪

けんけんば泥の跳ねたる斑雪

春の暮路地をひとひら舞ひ過ぐる

春の暮ボール捜して帰れぬ子

雪解風螺旋の先の鳶の眼

連獅子を舞ふ兄弟や若緑

朝風や結球ゆるき春キャベツ

花吹雪琵琶湖疏水に遊覧船

バカラにワイン信楽焼に田螺和

百人に百の空あり春霞

枘酒に花片浮かせ友を待つ

不器用なやどかり相手春日暮る

子が追ひ春の一日暮れにけり

岩の間のあぶくはきつと蟹の奴

雲流れ霽れゆく山や若緑

揺れながら風に膨らむ若緑

遠足のどの子も毬のごとく跳ね

遠足のバスはおしやべり歌笑ひ

逞しき風に育つや若緑

さいたま 寺町知子

若松の朝日に香る白寿かな

地震に耐へ兼六園の若緑

鉄橋の蒸気車囃す遠足子

御仏も愁ひ顔なる花曇

風光る印を結びて僧の立つ

池田瑠子

花菜風水塚にカフェの店開き

遠くから人の声する春野かな

「蚊相撲」の舞台に笑ひ春月夜

一葉を訪へばみどりの遅桜

朧三日月江戸の義賊の心ばへ

門真宏治

春深し櫻並木の緑めく

碧海や野生馬の食む草若葉

春夕焼トランペットを吹くをどこ

いつの間に独り離るる潮干狩

仰向けば飛行機雲や潮干狩

篠崎紀子

春の落葉を踏みしめてゆく影法師

春の陽や大社の薨なだらかに

小仏のごとき雷の躑躅かな

月おぼろ未完のままのノクターン

春の山広重の絵のそのままに

さいたま 霜多光代

越谷 阿部幸代

さいたま 反町 修

平塚 丸屋詠子

遅ざくら勢極まり空おおふ  
猫の行く夜道明るし遅桜  
花びらの色の神秘や紫木蓮  
天空に百のランプを紫木蓮  
せせらぎのリズムに和すや川柳

さいたま 山岸久美子

返信のなくて花冷えカプチーノ  
下校子を丸ごと洗ふ春驟雨  
肩書を捨てし男や落し角  
散らばつて蝌蚪それぞれの好む位置  
たちまちに更地となりぬ花は葉へ

さいたま 本橋稀香

畔塗に深き足あと山羊逃げた  
昨夜張りしか製造二課の花筵  
炊飯器鳴いて目覚むる昭和の日  
たはぶれに妻を背負ひて啄木忌  
暦はや百枚破く花吹雪

森下山菜

春深む湧き水流れ音清し  
春深き鳥の諸声山高し  
深川の法被姿や春深し

千坂平通

逃げ水や遠くに揺らぐ富士の山  
艶やかな輪島の朱塗り春嵐

永き日の鯉の背鱗の光かな  
定まらぬ風に追はるる野焼かな  
八珍を広ぐる宴花月夜  
馨しき乾通りや花曇  
逃水や消印の無きラヴレター

皆川更穂

この里にこの日の出合ひ夏の蝶  
絵説法掲げ山門濃き青葉  
半夏生屋並彩どる花手水

香田裕誌

夕顔や灯る迷路の神楽坂  
般若湯膳に肴の木の芽和

上京の受験子を待つ駅ホーム  
参道に野良着の人や苗木市  
光堂を飛燕旋回してゐたり  
昨夜の雨名残の花を残しけり  
初虹や森の泉のあたりより

加藤でん治

波乗りの男が二人春の海  
流木の形いろいろ春の海  
春の海奇麗な石を拾ひけり

若狭 山崎郁子

春の海テトラポッドに群れ鷗  
忘れえぬあの大津波春の海

春の野をグラススキーが跳んで行く  
はる沼にも愁ひのありて君の影  
かたくなに知らん振りして遅桜  
故郷に不義理いくたび霜くすべ  
分校の鉄棒錆びて遅桜

さいたま 飯田忠男

春の星池に映るは乙女座か  
その縁起土師寺にあり桜餅  
菜花揺れ顔出す猫の目の丸さ  
夕暮に菜の花明り照らす土手  
菜の花や渡しへ誘ふ女あり

利根 倉田星歩

真四角に想ひ出隠す春炬燵

吉川 杉浦千祐

八重桜黒塀続く武家屋敷

さいたま 竹澤和子

悲し気な歌謎めきぬ雛祭

一つ手前の駅より歩く春の暮

嘘つきの涙の跡か一輪草

恋心ただほあほあと桜餅

春風と銀座パーラー銀の匙

さいたま 綿引まりこ

健やかに伸び記念樹の八重桜

小川洋子

退院のバッグ持つ手に春の風

蝌蚪の国水に梵字の揺らめけり

沼底は河童天国春の宵

空き瓶に菜の花二本無人駅

恋ふ人に甘えてみたし春の風邪

並びたるアクエリアスは春の風邪

煮魚の小さが良し春の風邪

石鹸の足されてをりぬ春の風邪

カーテンの僅かな光春の風邪

吉川 拓真

記憶鮮明吉野千本桜かな

森下美智枝

一目千本吉野の山に春の月

花の旅選ぶ土産は柿の葉寿司

いと重たげに御苑の奥の八重桜

家中の窓開け放つ弥生かな

寝静まり蝸蚪とたはぶる若き父  
言ひたげに肩先つつく若緑  
蛙の子空き瓶底に波を生む  
遠目にも光得てをり松の芯  
行く春や十字にくくる参考書

川口 新井のり子

新しき庭あたらしく花水木  
蒲公英は再開発を呑み尽くし  
お点前の微かな音や夏隣  
春惜しむ急行待ちの駅の端  
ゆく春や閉店前のアマデウス

さいたま 石関六弦

ふらここや記憶の小箱ぼんと開く  
彼岸会や父そつくりのまむし指  
風撫づる笑ひ上戸の豆の花  
桜餅食みたる数の笑顔あり  
春の海日にち葉を信じたり

若狭 松村笑風

浦里の若手舵取る春の海  
葉桜の下澁刺と登校生  
穀雨くる農業校の試験田  
ペランダの菜園満たしゆく穀雨  
出発の朝の清閑梅雨兆す

若狭 岡本祥子

清流の砕けて白き峡の春  
春の湖太公望の指定席  
辛夷咲く球児の指の太きかな  
春暁の里に沁み入る瀬音かな  
鞆や足でがつちり雲掴む

畠中八重子

春風や運は自ら掴むもの  
蝸蚪広き自由世界に出でにけり  
陽炎やブランドシヨップの値札ども  
鐘の音のただよふ街や夕霞  
山間の風見あぐれば夏近し

さいたま 秋谷風舎

待ちわびたる桜開花やコップ酒  
微睡みの山に色なす山桜  
落椿苔をしとねに艶ませり  
朝掘りの土の香つけて筍届く  
春愁や親しき友の忌を迎ふ

和歌山 嶋田洋子

球根の土押し上ぐる浅き春  
銀鼠の祖父の山高猫柳  
開幕のスタジアム揺れ花菜風  
つくづくし義母のもてなすきんぴら煮  
頭上注意施設の軒につばめの巢

阿部貞代

離れゆく筏見送る残花かな  
をちこちの木の芽眩しき門出かな  
ゆきゆきて残花に出会ふ余生あり  
花の下かざす掌皺の数  
酒盛の浮かれ花見や通り雨

さいたま 鈴木香音子

一一〇番通報レベル猫の夫  
花月夜ひとひら受くる運命線  
河川敷鴉に自慢春シヨール  
行く春や鎖骨に這ひてゐるくさり  
蒲公英の絨毯波乱の旅路にも

大 阪 飯塚智恵子

乾きける古き街かど春驟雨  
初蝶やひらり黄の海潜りけり  
狂ほしく翅翻し蝶の恋  
カーテンを海の色目に夏隣  
錫のジョッキの輝き冴ゆる夏隣

前田夏野

さいたま 駒谷行雄

無彩色の瓦礫の中に草萌ゆる  
十三湖風なほ強し蜆汁  
草藤と図鑑で知りぬ野辺の春  
いくつもの料理思ひて芋植う日  
小綬鶏に混りて聞こゆ子らの声

湯浅 和

蛭田律子

春灯や手すきの和紙の薄明り  
岩壁に垂るる鎖や風光る  
陽炎や武者行列が練り歩く  
かぎろひて古木の天に昇る如  
ひとつかみおまけに載する蜆売

翳す手に出来立ての春ふんはり来  
塔頭に献香の風彼岸かな  
映映しき光の粒に花筏  
風甘し香華満ちたる灌仏会  
光湧く銀輪の列土手青む

仲子の惜しげなる背に春の風  
雨けぶり蝌蚪の集まる水田かな  
春の風行つたり来たり垣根越え  
陽だまりにきらめき強き蝌蚪の群  
山峡の村村撫づる春の風

篠原さよ子

石井直子

富士望む海へふらここ漕ぎ出しぬ  
囀や掃除機軽くかけてをり  
友持て来ぬれ煎餅とフリージア  
「愛しのエリー」流るる車中春霞  
妙義山三葉つつじの分岐点



蒲公英や路傍の石の両隣

さいたま 平野 楽

大阪 遠藤人美

蒲公英は草むしりから対象外  
母老いてなほ降り積もるはだれ雪  
はだれ雪庭にも田にも畑にも  
爪先を鳩舞ひ上がり風薫る

草餅や音量上げて時代劇

緒方みき子

東京 畑宮栄子

旧友の音沙汰無しや春の夜  
風音に体預くる飛花の夜  
穂の芽の天ぶらの音夫待たる  
花曇のんびり歩む土手ニキ口

名画座に初蝶ヒロインは卒寿

横山礼子

さいたま 高原和子

乗客のリレーで降ろす迷ひ蝶  
嬰兒の午睡を覚ます蝶の風  
学らんの鉦眩し夏隣  
夏近し荒川土手の草の色

園児追ふ蝶の高さに遊ばれて

糸井しるく

武田重子

高圧線に届く双蝶乱舞かな  
夏近し通学班の白き帽  
うらうらと日は照り蝶の翅ひらり  
肉筆の便りは遠く夏隣

茶所の萌芽宣言四月かな  
「ボワレ」てふ料理雅や桜鯛  
竹笛にそつと手を添へ春惜しむ  
花疲れして「百均」のパンを買ふ  
再会の約束かはす春の昼

花筏舟を漕ぐのは若き女  
愚かなる行為止めずに春愁  
花散るや狂ふお七の乱れ髪  
鉄橋の音の軽やか春の旅  
銀髪の友の元氣や昭和の日

粕漬にされて売らるる桜鯛  
適当に捌きてしまへ桜鯛  
清らかに流るる水や山葵沢  
水音の耳をくすぐる山葵沢  
手をやれば切らるるほどや山葵沢

一口の蜆汁より料理膳  
稜線の上なる富士や雪残る  
気立て良き姉妹の笑顔桃の花  
幼子の遊ぶ傍ら雀の子  
ひと雨に減り片側の花筏

うつぶせの砂の裸婦像磯遊  
ぐずる子をあやす母の手磯遊  
春霞靴音高く初出社  
枘酒をすすりほろ酔ふ暮の春  
稜線の暮れ残りたる春の夕

さいたま 三浦真由美

清明を五感に感じ歩く土手  
清明や閉づるまつ毛に陽が透くる  
四月馬鹿大嘘つきて大出費  
清明や盆栽に早小さき実  
清明や未練などなき店仕舞ひ

さいたま 北出久美子

老いゆくも秘むる恥ぢらひ残花かな  
都をどりの通ひ稽古や連れ立ちて  
信濃より予期せぬ友の花便り  
鬢結へぬ力士に賜杯夏近し  
ゆらゆらと蝶も老後の一日かな

羽鳥秀子

残る花今朝は一人のランドセル  
糸遊や既視感覚ゆる風と影  
陽炎や球場の熱滞留す  
山独活の癖の強きを好みけり  
しどけなく房を乱せり藤の雨

岡田芳春

入門のウクレレ教室日永かな  
快音は逆転なるか春の芝  
春驟雨音量増して屋根を打つ  
佐渡島の港しーんと春夕焼  
新人の気象予報士春の色

所沢 飯室夏江

夏帽子一本橋を渡りたる  
少年は旅路の途中菖蒲風呂  
雲の峰千切つて食ぶる長いパン  
掌にひとつ落ちたる夏の星  
死ぬ時は歳時記を閉ぢお花畑

所沢 関根千恵

先達に添ひて木曾路や春霞  
春霞バスで行く草千里かな  
砂山の溶くる波間や磯遊び  
子も親も宝探しや磯遊び  
S.Lの真岡鉄道春の野へ

さいたま 木谷葉子

鳴き砂のかそけき韻き桜貝  
桜貝ボトルシップの船出かな  
春雨やお座敷あけの左棹  
掛茶屋のやかんの滾り春の雨  
百匹のひつじむにやむにや大朝寝

さいたま 森美枝子

うぐひすの声はすれども広き空  
辞職して下ろす肩の荷春夕焼  
転勤の内示どきどき春の風  
蝌蚪よ蝌蚪自由に生きたる明日は来る  
春風に背中押されて水溜り

さいたま 川島夕峰

濃き淡き二種の草餅店頭に  
石鹼玉卒寿越えたる姉の逝く  
石鹼玉弾け幼児目ぱちくり  
花冷えや堤の茶屋のちらし寿司  
曇天の明るき辺り桃の花

さいたま 鈴木藻好

桜鯛伊豆海岸は今日も風  
桜鯛新郎新婦の披露宴  
晩春や刻苦勉勵夢の外  
桜鯛うろこ飛ばして切られけり  
山葵田に長靴ずぼずぼ男衆

山下ユリ子

四月馬鹿悪党改め頭剃る  
亡夫より動画配信万愚節  
難しき知恵の輪解けて万愚節  
清明の一日鼻水止まりけり  
清明や駅の階段二段跳び

北山建治郎

忘れたきことを流して夏の川  
大都会日傘の花を咲かせをり  
手を繋ぎ胸を踊らす大花火  
球児らのプレー見下ろす入道雲  
小さき部屋母から届く夏布団

若狭 佐野友夏

掘りたての友の骨折り春惜しむ  
春惜しむ空席多き句会かな  
廃語なるかな「寿退社」春惜しむ  
惜春や探し当てたる山野草  
魅せられて謎に迫るや磯巾着

小田三茅

ペデイキュアの水玉模様夏近し  
球児らの頭は青し夏近し  
ハーブの香日に日に強き夏近し  
花びらに紛れひらりと蝶の恋  
花時や信濃連山桜色

さいたま 樋口元美

老若に桜トンネル足勇む  
弁慶に因む和菓子や春の昼  
花吹雪両手広げて幸つかむ  
桜鯛世界一周の夢を見る  
川面まで伸びたる桜今盛り

和歌山 南條さわゑ

シート敷き桜で遊ぶ童かな  
山間をうぐひすの声鳴り響く  
わいわいと鳶を見守り潮干狩り  
白浜の新緑映ゆる波しぶき  
山歩き見初むる草木山笑ふ

東京 桐山遊童

めぐり合ひ第一ボタン卒業す  
雪柳花満ちて揺るる夕明り  
亀鳴くや何やらうれし爪の紅  
日永し広場の子等にチャイム鳴る  
木の芽ふくジヨギングコース真直中

柳父はる

三日月のゴンドラ浮かぶ春の宵  
爛漫の錦絵成せる春満月  
春雪のギャラリー吾が絵初入選  
仏生会寺のマリンバ演奏会  
祖父と孫土筆摘み来てママ煮付く

宮代 関谷多美子

久々の青空となり初音きく  
軒の巢もそのままにあり初つばめ  
あふれくる桜さくらの句会かな  
花ふぶきけふも出会ひし杖の人  
売り切れの一品のあり遅桜

鬼石 榊原聰子

焼きたてパンの幟はためく桜時  
春障子木の葉の影絵遊びをり  
桃花散り猫の耳にもイヤリング  
たんぼの絮ふんはりと風に乗  
白子干どこに目がある口がある

さいたま 石浜悦子

先づ一猷庭の路の臺味増添へて  
春の旅コートは若き日の着物  
我も欲し石割桜の逞しさ  
花を追ひ弘前城まで列車旅

藤沢 小島喜代子

遊歩道下駄の音とほく残花かな  
陽炎の消えゆく道に通り雨  
陽炎や去りゆくひとの影隠し  
風が舞ひ花散り敷きて残る花

草加 持永喜夫

熊の名の男に手向くる霞草  
近寄ればたちまち疎なる霞草  
かすみ草骨となりても大男  
今度こそあやまれたのに春の夢

東京 山中いちい

ぶらんこと共に落ちゆく大空へ  
折り紙の花をくれる子チューリップ  
足の裏に熱こもりをり春の夢  
春の夢ずつと捜してゐる切符

横浜 石井妙子

早朝の小さき庭に茗荷竹

早朝の仏間明るく君子蘭

菜の花や満開となり日暮どき

裏庭にかすかに揺るる藤の花

藤岡 加藤ナヲ子

枯れ花も包むがごとき霞草

爆睡の我に遠きや春の夢

春の夢びしやりと決まり不合格

クレーンと共にゆきたし春の夢

東京 深沢りこ

おむすびのぴりつとしたる春の昼

夢続き目薬点して大朝寝

君弾くやギターの調べ大朝寝

中華丼甘酢あんかけ春昼に

さいたま 落合和枝

入社式学生服で金釦

大阪や修学旅行地入社式

藤沢 藤田寛二

※主宰が添削をしている句があります。

提出した句を思い出して勉強して下さい。

# 特集 越境する俳句

詩人と俳句、俳句と詩

安里琉太／草野早苗／佐藤文香

鈴木 崇／高橋修宏

森川雅美／八木幹夫

▼巻頭三句

安西 篤／權未知子

阪西敦子／橋本喜夫

米田規子／井上論天

▼今月の華

新井大介／松本てふこ

▼俳句と短歌の10作比較

なつはづき

なみの亜子

「澤」東北吟行記

井上雅恵

▼人と作品

大竹多可志

『デジャ・ビュ』

▼好評連載

成瀬政博

とりあえずの日々

筑紫磐井

俳壇観測

坂口昌弘

忘れ得ぬ俳人と秀句

青木亮人

句の手触り、俳人の響き

大西朋

俳句へのまなざし

井上泰至

俳句の詩語

イメージ辞典

神作研一

てのひらの江戸

——古典籍を旅する

藤村公洋

俳句のつまみ

穂矢まりえ

諸家書架

二ノ宮一雄

一筆百里



2024年8月号

7月20日発売  
定価1100円(税込)

<https://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

# 作品鑑賞

## 山本鬼之介

強面の忠義面して義士祭へ 清水桂子

吾家に、「赤穂義士 誠忠畫鑑」という絵物語の本がある。38 cm×21 cmの横長で、絹張りの表紙の豪華なものである。その表紙には、上記の書籍名と、大石内蔵助が討入りの際に用いた兜と山鹿流陣太鼓の絵が浮き彫りになっている。この本の発行日は昭和十四年六月十四日、定価は弍円八拾錢、編輯は「國史名畫刊行會」。物々しい文体の発刊の辞と赤穂義士人名録につづき、五十枚の絵と細かな文字によるそれぞれの絵の解説が記されている。細密にして華麗な日本画の画家の雅号と落款がそれぞれの絵に記されているのだが、残念ながら判読出来ない。幼少の頃から繰返しこの本を繙き、長じるにつれて解説文を読んで忠臣蔵に親しんできた筆者である。

日本人の多くが今もって赤穂義士を身近に感じ、香煙の絶えることのない泉岳寺に多くの人が参詣する。四月一日に始まる義士祭に、作者もその中の一人となって厳肅な面持ちで参加したのである。艱難辛苦を共にした四十七士のことを思

うにつけ緊張した心根が顔面に顯れる。「忠義面」という短い言葉が、その時の作者の面相と気持を活写している。

店番に寡黙なオウム 四月馬鹿 菅原卓郎

インコと同様に人の言葉や鳥・動物の声を真似るのが巧みな鸚鵡である。この句の店の業種は不明であるが、何となく来店客が少なく、老齡の店主が独りでやっている物販店のような気がする。例えば古くからその町に根付いている古書店とか、荒物屋を想像すると、掲句の雰囲気は浮かび上がってくる。普段は偶に客が来ると人語を真似て奥に居る店主に知らせるのだが、今日は機嫌が悪いのか珍しく静かである。利口な鳥であるから、エープリルフルのことを識っているのではないかと思えるような面白さがある。

遠足の腕白揺らすかつら橋 新 曆文

春は遠足、秋は運動会の学校行事がきちんと守られていた昔が偲ばれる俳句である。関東であれば、奥多摩溪谷辺りがこの句の舞台にぴったりである。小学校高学年の児童であろうか、女子児童が渡っている蔓草の巻き付いた吊橋を数人の男子児童が面白がってゆつさゆつと揺らすと、女の子たちがぎゃーきゃー悲鳴を上げ、それが山々に笈する。

夏近し青海波透く薄造り 岡田宣子

伊万里焼の白磁の大皿に、美しく盛り付けられた高級魚の薄造りを思い描く俳句である。皿に描かれた青海波の絵柄が、料理を一層引き立てているのがよく判るから、句を読んでいてついつい生唾が溢れてきってしまう。偉大な芸術家、そして料理人でありまた陶芸家でもあった北大路魯山人が遺した有名な言葉「器は料理の着物」が、この俳句に活かされている。食器は料理の魅力を引き出して鮮やかに彩る衣服のようなもので、料理の味や香りそして盛り付けを引き立てるのに欠かせないものであることを再認識した。

記念日にひな菊の束胸に抱く 菅原真理

英名をデージーという雛菊で、10cmほどの茎の上に直径2cmほどの小さく可憐な花をつけている。花の色は、薄紅色・桃色・白などいろいろあるが、どれもが優しく親しめる色である。花びらを一枚ずつ千切つて恋占いをする花だと聞き、あらためてこの花に興味を抱いた。

さて、どのような記念日なのであろうか。小さく可愛い花であるから、記念日も家族や友人などが集まって祝ってくれるようなものではなく、ごく限られた者しか知らない記念日、たとえば、作者だけが永年想い出として遺してきて今でも胸

の奥に仕舞っている「初恋記念日」なんかを想定するとびつたりなのかなと思う。

酒星や枅に塩盛る粹な人 小林京子

本醸造の常温酒を枅に注ぎ入れ、枅の角に粗塩を一つまみ載せ、塩を舌先につけて枅の角口から酒を飲む。むかし勤め人の頃、退社後に角内ち（かくうち）酒屋の脇に設けられた立ち飲み席で塩豆や鰯などの乾き物を肴に酒を飲むこと）で飲んだ枅酒の味が懐かしい。今でも枅で酒が飲める店はあるが、当時の超庶民的な気分は味わえない。掲句からは、筆者と同様の体験をした人の今の姿が見えてきて、同席して供に一合枅の酒を酌み交わしたい気分である。季語の「酒星」はこの句のためにあるように思えて、それを選んだ作者もぜひその席に加えたい。

春雷や水草揺れて泡ひとつ 寺町知子

曇り空の彼方から「ころころ」と控え目な雷鳴が聞こえてくる。恐怖感を伴う夏の雷鳴とは違って、春雷のそれは親しみの持てる音である。春雷の音に触発されたかのごとく、池の畔に生えている水草が揺れ動き、水草の茎に沿ってぽつりと泡が上がってきて、作者の俳句心を刺激したようだ。

バカラにワイン 信楽焼に田螺和 池田珪子

名高いバカラグラスに選りすぐりの仏蘭西ワイン、そして、日本六古窯の一つである信楽焼の侘・寂の趣のある小鉢に盛り付けた乙な肴の田螺和え。まことに粋な取合せで、一読して思わず感嘆の声を発してしまった。実際に作者がこの境地を味わっておられるのだとしたら実に凄い。

枅酒に花片浮かせ友を待つ 門真宏治

門真家の庭の桜で花見をされているのであろうか、実に優雅な雰囲気伝わってくる。枅に地酒を注ぎ、ゆつたりと口に運ぶ。満開に近い桜の枝からはらりと花片が落花して酒に浮かぶ。これもまた一興である。学友かそれとも元の職場の同僚か、気心の通じ合った親友の来訪を今や遅しと待ち倦んでいる。縁台に敷いた赤毛氈に夕陽が射して美しい。

遠足のどの子も毬のごとく跳ね 篠崎紀子

晩春の見事に晴れわたった日の遠足。先生方に引率されて目的地に到着。都会の小学校の児童達なので、普段は自然環境に触れる機会が少ない。今日は思い切り大声を出して走り回っても周囲に迷惑を掛けることが無いので、先生方も安心して見守っている。中七から下五の措辞が、その様子を遺憾なく活写している。

若松の朝日に香る白寿かな 霜多光代

「若松」は、「若緑」の傍題として歳時記に載っているが、常緑樹で目出度い木としての旺盛な生命力を表す言葉でもある。晩春の頃、松の木の枝から直立する蠟燭のような新芽に朝日が射し、若松をそして松の木を際立たせている。早朝廷に出て若松の際立つ松の木を眺めている白寿の人に、若松のような活力が感じられる。

臈三日月江戸の義賊の心ばへ 阿部幸代

江戸の義賊というと、架空の人物も含めれば「○○小僧」という名で数人出てくるが、やはり実在の人物となると誰もがご存じの「鼠小僧次郎吉」に絞られる。次郎吉は武家屋敷専門に盗みに入り、盗み取った金を江戸の庶民に配ったとの説があるが、事実はそんな綺麗事ではなく、盗みの道に入った動機は、博打に使う金欲しさからだったようだ。出出しからこんなことを書いてしまつて折角の俳句に水をさしてしまつたが、歌舞伎をはじめとする舞台や映画、小説、テレビドラマなどでは、苦み走つた好い男として登場し、噂のとおり庶民に愛され崇められている。

「月は出でしも三日月の 臈に霞む大屋根に すくと立ちたる男伊達……」と、見得を切る次郎吉の鱗背な姿が迫つて



くる俳句である。

春夕焼トランペットを吹くをとこ 反町 修

麗らかな陽が西に傾き、やわらかな夕焼けが空を染める。丘に立っている男が、夕焼け空の下で高らかにトランペットを吹いている。プロとは言わぬまでも、それに近い腕前と思われる技量である。防音装置の整った部屋や演奏会場以外の屋内では吹奏しにくい楽器であるから、近くに人の居ない屋外なら心置きなく吹けるだろう。日が暮れるまで一頻り吹奏し、すつきりとした気分で丘を去った。

月おぼろ未完のままのノクターン 丸屋詠子

音符や楽器演奏に縁のない筆者でも、語彙から想像するノクターンの曲の雰囲気には大いに惹かれる。将来を嘱望されながら若くして惜しくも病死した作曲家の自宅。生前のまま遺してある亡夫の仕事部屋に妻が入り、ピアノの上に置かれている楽譜を手にとって亡夫を偲んでいる。書きかけの楽譜を遺して逝ってしまったと思うと心が痛むが、この未完の楽譜をそのままにしておけば、朧の夜の帳を開いて夫が現れ、その楽譜を書き足して曲を完成させるような気がしてきた。「未完のノクターン」寂しくも響きの佳い言葉である。

猫の行く夜道明るし遅桜 山岸久美子

犬の場合は放し飼いを禁止されているが、猫はそうではなく、特に野良猫なら自由に外歩きができる。花見シーズンが終わった頃、月夜の道を大きな野良猫が悠々と歩いている。人に注目されない遅桜が猫と慰め合っているようだ。

炊飯器鳴いて目覚むる昭和の日 森下山菜

炊き上がると音を発する炊飯器なのか。目覚し時計のような効果で起床した昭和の日の朝。今日は久しぶりに昭和時代の名残の街を散策してみよう。

逃水や消印の無きラヴレター 皆川更穂

郵送のラヴレターでないことは確かである。となると、相手から直接手渡されたもの、家の郵便受けに入れられたもの、人を介して届けられたもの、スマホに届いたメールなどが考えられるがなかなか決め手が得られない。まさに「逃水」のような俳句である。

初虹や森の泉のあたりより 加藤でん治

初虹は、春の驟雨の後に現れる淡くすぐ消えてしまう虹である。儂さはあるが、逆に心に残るものではないかと思う。俄雨の後、郊外を散歩していたら、森の辺りから薄らとした虹が現れた。恰もそこに湧き出る泉の化身のように思えた。

# 水琴窟

(五月号鑑賞)

池田雅夫

外壁をのた打ち回り春一番 山戸美子

「春一番」は春になって最初に吹く強い南風。生暖かく、春になったことが実感できる。連立するビルの街であろう。高いビルに阻まれ行先を失った風は、ビルの壁を下へ下へと吹き荒れる。「外壁をのた打ち回り」が風の強さを表わす。

春の日や駄菓子の中に当たりくじ 石関六弦

昭和の時代、小さな町にも駄菓子屋があり、子供のたまり場になっていた。子供の購買意欲を誘うように「駄菓子の中に当たりくじ」が入っているものが多かった。「春の日」のうららかさにはのほのとした町の景が重なり、共感する。

壇上の桴の響きや宵の春 鈴木香音子

「壇上」であるから、春の祭りの催しであろうか。それを「春祭」と云わず、「太鼓」と云わず、「桴の響き」だけに集中し、「春の宵」の季語を引き立てる工夫に感心した。

子らが扮する白狐の雅楽午祭 森下美智枝

「午祭」は、全国各地の稲荷神社や屋敷の祠で行われる祭りで、とくに二月が大祭とされている。「子らが扮する」「白狐」や「おかめ」などが「雅楽」に合わせ舞っている。二月の最初の午の日の縁日を「初午」という。

学帽を目深に被り大受験 鈴木藻好

「学帽を目深に被り」からは、純心で朴訥な受験生を想像する。おそらく丸刈りであろう。大学の入学試験、あるいは就職試験かも知れない。近年の都会の学校では学帽を被ることが少ないように思う。「大受験」の緊張感が迫ってくる。

扇状の白一色や梅の里 畠中八重子

古来、詩歌に詠まれてきた梅の花。紅梅、白梅など種類が多い。中でも五弁白色の野梅はもっとも多く分布している。「扇状の白一色」とあるので、扇状地や地すべりによる扇状の地形であろう。「梅の里」にもようやく春が訪れた。

常緑の葉に隠れたる木の芽かな 鈴木敦子

常緑樹は椿、椎、樟、松、みかんなどである。その葉陰に出る新芽なので、落葉樹ほど印象に残らない。めだたない常緑樹の「木の芽」に着目したところが斬新で独創的である。

## 時刻表に数多の付箋春を待つ

大熊健司

春になったら旅行をしようと、あれこれ計画を立てているのだ。ツアーなどではなく、意のままに目的地を決め、「時刻表」を開き、列車などの行程の案を練っている。「数多の付箋」に「春を待つ」心模様が写し出されている。

## 春の日や路地いつばいの電車の絵

羽鳥秀子

「路地いつばいの電車の絵」は、子等がろう石で描いたのであろう。昔は、近所の子等と一緒に遊んできた路地。そんな姿を今はほとんど見られない。冬が過ぎ、ようやく暖かくなった「春の日」を待ち兼ねかねたように遊んでいる子等。

## 小抽斗開けては閉じて春ひと日

鳴海順子

冬の服装から春の軽い服に変えようと、箆笥の抽出しの中から取り出している。姿見の前で羽織ったり身に当てたりと、なかなか決まらない。「小抽斗開けては閉じて」のくり返しに「春ひと日」が過ぎる。春ならではの幸福な時間なのだ。

## 春浅し帽子をぐつとかぶりけり

小駒さち子

春になったとはいえ、まだ寒い日もある。一旦気がゆるむとよけいに寒く感じる。今年はとくに寒暖の差が極端に大きく、思わず「帽子をぐつとかぶりけり」に実感がこもる。

## マンホールの蓋黒々と春の雪

柳父はる

「春の雪」は湿っぽく淡い。積るかと思えばすぐ溶ける。路傍の芝が白くなり、次に歩道。そして車道が白くなる。車の通行で轍ができることもある。思わぬ雪の量で白くなった路面に「マンホールの蓋」だけが「黒々と」浮び出ている。

## 透くる陽に絡む白き根ヒヤシンス

蛭田律子

「透くる陽に絡む白き根」？ はて、何のことかと続きを読むと、「ヒヤシンス」とある。そうか、ヒヤシンスの水栽培かと納得した。春の日射しが鉢を透り抜け、根を照らしている。「絡む白き根」にヒヤシンスの生命力が現れている。

## 買物のいつもの道や木の芽風

高原和子

平穏な日常のひとつ。規則正しい生活、食事は健康にもよい。運動を兼ねた買物かも知れない。通い慣れた道の木々や草花を愛でるのも楽しみである。花の少ない春のはじめ、「木の芽」がようやく風に戦いでいるのを悦んでいる。

## 百粒の福豆に戸惑ふ媼

鳴田洋子

節分の豆撒きである。その豆を歳の数だけ食べるのが「福豆」。「百粒の福豆」とは驚き。百歳の御老婦なのだ。目の前に百粒もの豆を出されたら誰もが「戸惑ふ」のが必定。

大村節代 選

鼓  
笛  
集

やさしさのある句と記され風薫る

梅雨冷やカフエ「温々」に子供の絵

雨の日の樹木葬には紫陽花を

検査日の制限重し聖五月

検査果て五月の街の空気かな

聖母月金子みすゞの詩と眠る

風渡る雨後の新樹の息づかひ

菊坂に沿ひてぼつぼつ夏灯

卯の花や山ごと薫る高尾みち

綿引まりこ

吉川拓真

菅原真理

若葉風吹くや湖畔にカルテット  
少女等のアンネンボルカ夏の雲  
投げ銭の少なき楽師夕立風

春雷になじむ鳴き竜御寺かな  
御寺なる楊貴妃の蛾眉麗らけし  
おがたまの気高き香り神事待つ

桑の実の繁る川角別れ道  
勢よくランナーが這ふ露地莓  
じやがいのもの花の実を待つ地藏様

手水舎に先づは大社の青葉かな  
ひとときの平和がここに薔薇の園  
学舎の吹奏楽部麦の秋

純白の玉巻く牡丹嬰眠る  
抱き癖のつきて男の子や鯉幟  
赤児抱く吾もマリアか聖五月

母の日にスタンプひとつばか息子  
はにかみも艶を湛へて金魚の尾  
こんな日は背筋を伸ばしサンダラス

山門に日傘窄むる佳き男  
奉納の団扇配る児声潤らす  
来迎会歩み怪しき菩薩をり

池田珪子

霜多光代

阿部幸代

丸屋詠子

本橋稀香

山中いちい

横山礼子

梅雨晴れの空むき出しの青さかな  
下り行く夜行列車や熱帯夜  
我知らず息をとめたる炎暑かな

記念日と一緒に感謝十葉かな  
石楠花や女将の紅の色の濃し  
パーベキュー人揃はぬまま燃え盛る

安房の鮎本店集ひ喜寿祝ふ  
九十九里の白き灯台風薫る  
日に百本淡竹の子取り配る朝

夏場所や夫の定位置テレビ前  
三歳児なりの思案や五月かな  
夏場所や故障あれども前をむく  
晩春や三猿招く東照宮  
ピチャピチャと駆ける子供や汐干狩  
苛立ちて消えた日常晶子の忌

母の日や遺伝の濃さを笑ひ合ひ  
口紅をなほす手鏡姫女苑  
誰知らずうなじに一滴の香水

秋谷風舎

ソーダ水喉の奥からシユワシユワと  
三社祭寝癖のままに仁王立ち  
三社祭年季奉公こぶのあと

持永喜夫

川島夕峰

### 鼓笛集作品評

大村節代

森下美智枝

やさしさのある句と記され風薫る  
句評に喜び、それを銜いなく句にする作者。思わず「よかつたね」と声をかけたくなる。風薫るの季語によって、そつと喜ぶ作者の晴れ晴れしい様子が伝わる。

綿引まりこ

榊原聰子

### 検査日の制限重し聖五月

吉川拓真

掲句には同感した。掲句と同じ思いの人が多くいると思う。検査を受けるのは全く大変だ。酒を制限され、食事も前日の夜八時まで、朝食はなし。水はコップ一杯位等々。本当に中七通り。せつかくの聖五月なのに、いや聖五月の季語によつて救われているともいえよう。

### 卯の花や山ごと薫る高尾みち

菅原真理

小山あつ子

中七よつて高尾山に誘われ、山道を思い出しながら、思わず「夏は来ぬ」と唱歌を歌っていた。菊坂、高尾みちと地名を上手く取り入れ、初夏のさわやかさが伝わる。

鼓笛集巻頭（六月号）

私の好きな一句（自句自解）

清水桂子

庭下駄にひと休みして散る桜

夫に先立たれた後、大きな男物の下駄を、用心の  
為、踏石に置いておくのだが、春は桜の花びら海棠  
そして山吹と、下駄の上にならず、ひとひらふた  
ひら乗っている。それがひと休みしているように、  
私には見えて、その光景を詠んだ句です。

水明発展基金御礼（敬称略）—令和六年五月三十一日現在—

山本鬼之介	50	口	関根千恵	5	口
山岸久美子	1	口	下川光子	5	口
町野広子	10	口	永野史代	10	口
丸山マシミ	5	口	佐々木史女	5	口
上戸千津子	10	口	保坂翔太	5	口
石川理恵	10	口			
	合計	116			口

毎月25日発売 定価1000円(税込) 月刊 **俳句界** 2024年 **8**月号

**特集** 語り継ぐこと  
〜世界が変わった8月

- 特別寄稿 村田喜代子 柳広司
- 映画『オツベンハイマー』を見て  
西生ゆかり 中山奈々 黒岩徳将 小野あらた
- 忘れられない作品  
久保純夫 こしのゆみこ 山下知津子
- 永瀬十悟 仲寒蟬
- エッセイ「語り継ぐこと」 大関博美
- トラビアン 俳句界NOW 花谷清

特集 **俳句百物語**〜ホラー・妖怪と俳句

- なぜ人は「怖いもの」に惹かれるのか？  
朝宮運河（怪奇幻想ライター）
- 妖怪の名前は俳諧で増えた？ 香川雅信
- 「怖い俳句」セレクション 倉阪鬼一郎
- 私が思う「怖い」俳句  
甲斐由紀子 山田耕司 榑部天思  
池田瑠那 外山一機

【注目の句集】安原葉「明易」

＊セレクション結社「輪」大輪靖宏

私の一冊 水口佳子「夕風」

「俳句界」投稿欄 一流選者11名！  
日本一充実の投稿欄

※一部変更の可能性があります。  
お求めは…●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2島ビル8F  
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

株式会社 文學の森

## 句集喝采

曲淵徹雄

### ◆岩淵喜代子「末枯れの賑ひ」

ふらんす堂

著者略歴 昭和十一年東京生。昭和五十一年「鹿火屋」入会。昭和五十四年「貂」創刊に参加。平成十二年「にん」創刊代表。句集「朝の椅子」・「螢袋に灯をともし」・「穀象」等。賞 俳句四季大賞・詩歌文学館賞・日本一行詩大賞。日本文藝家協会会員。俳人協会会員評議員。現代俳句協会会員。

『穀象』から六年後の第七句集。著者は武蔵野に住み、雑木林の移ろいを眺めながら、詩心を虚実には遊ばせて句が作られている。

水底を水の影ゆく帰り花  
笹鳴きを爪先立ちて見ることも  
根元まで濡れて芽吹きつゝの雑木山  
瞳より濡れてふたつの袋角  
胡麻叩く昔を呼んでゐるごとく  
以上五句、写生から抒情の詩が詠まれる。左記の五句、感  
性と視点の置きどころを思う。

仏法僧月に模様を生まれけり  
空蟬の中より虹を眺めたし  
牛たちに夏野の乳房四つづつ  
鬼灯を鳴らせば愚かな音なりし  
手秤で貰ふ 鯀の 五六匹  
他に「蛭が出て坊さんが来てくれにけり」「鬼などに出会  
ひてみたし露めけば」の著書の間味を思う句など。  
帯の位置決り寒雷遠からじ

### ◆酒井久美子「絵本の海」

ふらんす堂

著者略歴 昭和二十九年京都生。平成十九年「圭」入会。平成二十四年「圭」終刊。「朱愚」創刊、参加。平成二十七年「玉梓」入会。平成二十九年「玉梓」同人。俳人協会会員。

著者の第一句集。俳句を始めてからおよそ一六年間の句を取載。句集名は「長き夜を絵本の海に溺れし子」より。

爆心地に探す四葉のクローバー  
玫瑰や沖に弧を描く水平線  
よどみなく絵本を読む子や今朝の秋  
秋霖の幽かな咽び一の谷  
月光の禊のごとし去年今年  
天穹のゆりかごこぼれ枯木屋  
以上六句、近くから、遠くから景を写生して詠んだ句。次  
の五句は奈良在住の著者ならではの句。

火を追ふ火闇煌々とお山焼  
春逝くや夢殿は厨子閉ぢしまま  
かなかなや傘亭四方に薔開け  
見霽かす大和三山稲穂波  
天翔る火の粉春日の大とんど  
他に「麦の秋ポルターに古い風車守」「菩提子を拾ふ遺跡  
に弾の跡」の海外詠など。  
新雪踏む君と出会ひし朝のごと  
若若しい感性の著者は、俳句を友として日常の暮らしや旅  
を楽しみ、第二句集に向かって進み続けられることであろう。

網野月を選

山紫集

当て所なく連れに相槌残花道

篠原さよ子

残桜や味無きガムを噛んでをり

本橋稀香

真つ直ぐに散る日のありて残る花

飯塚智恵子

身ひとつの熊野詣や残る花

青木鶴城

処方箋二度目の先に残花かな

吉川拓真

残る花縁起直しを口実に

丸山マシミ

山あひの灯り集むる残花かな

秋谷風舎

残桜や縁側に置く煙草盆

檜鼻ことは

小熊座やコタンの闇に名残花

池田珪子

み吉野の裾に人垣残花かな

菅原卓郎

残る花橋のたもとに小商ひ

曲淵徹雄

残る花泉下の西行にはらり

正木萬蝶

残桜や沼に戻りし釣仲間

松井由紀子

訪れば残る桜の散る最中

松宮保人

見沼田の残花と言へど凜と咲く

松本光子

街並は移り変はりて残る花

丸屋詠子

鳥声の艶めくほとり残花かな

宮崎チアキ

— 以上特選



場所とりも一喜一憂残る花	持永喜夫	残花降る異言語の中大地の子	新 曆文
残る花峠の茶屋に猫もある	森 和子	残桜の花びらゆるむ風のとき	阿部幸代
残花なほ峡の夕映え尽しけり	森川義子	残花なほ異国混じる景勝地	荒井俱子
花びらを踏みて見上ぐる残花かな	森下美智枝	城趾の残花の碧を二羽の鷺	飯田忠男
竣工のビルに影置く残花かな	森美枝子	傷心に風の芳し残花かな	池田雅夫
老木の残花は風情りんとせり	山岸久美子	無住寺のお飾り僧侶残る花	石田慶子
人影なき札所めぐりや残る花	山下ユリ子	残花浴ぶ信号待ちのひとしきり	石川理恵
二つまでボタンを外し残花かな	山中いちい	残花いま杖をとどめし心字池	井上燈女
弾き振りに円熟味増す残花かな	湯浅 和	そよ風や木々の間に間に残り花	上戸千津子
残花散るなか分校の離任式	横山君夫	書写をする般若心経残る花	内田恵子
護国寺に命日待つ残花かな	横山礼子	学舎の合併に湧く残花かな	梅澤輝翠
箒川崖の残花は誰を待つ	綿引まりこ	咲き残る花に一会の風清し	梅澤佐江

偲びつつ面上ぐれば残花霏霏	大場順子	かいかぶりされて残花が重く垂れ	篠崎紀子
旅の途の残花に出会ひ喜びぬ	岡田宣子	土手に奏づるギターデュオ残る花	渋谷さいち
祖母住みし里山は今残花なり	加藤でん治	庭中の残花惜しむや首飾り	嶋田洋子
残花にも意地があるのよ店仕舞	川島夕峰	背にひらり去り行く人に残る花	清水桂子
白寿なる媪の見上ぐ残花かな	熊倉千重子	残花なほ山懐に鬼伝説	下川光子
菩提寺の厨に残る花白し	河野はるみ	堀割に残花の余韻こぼしつつ	霜多光代
残る花心の機微を醸し出す	越田栄子	残り花古墳の丘を染めて散る	菅原真理
山路来て苔生す枝に残花かな	小林京子	見晴らせば残花母の住まふ家	杉浦千祐
残る花人影のなき特攻碑	近藤徹平	姉の訃や白き名残の花見上ぐ	鈴木藻好
残花中出店の一品売り切れに	榊原聰子	夕さりてボール蹴る子に残花かな	鈴木玲子
乱れるも風雨に耐へし残花かな	佐々木史女	残り花一日収むる脳トレ日記	関谷多美子
残花散り置いてけぼりの三輪車	笹本啓子	男少なし残花輝く同級会	瀬戸雄二郎

残花かな煙るあだし野念佛寺

染谷風子

残花なほ余生を過ごす鎮守様

畑宮栄子

禅寺の名残の花や魚鼓の鳴る

反町 修

散り際も美しくあれ残る花

原田秀子

八十路髪へ飾れと一片残花かな

高橋満耶子

薄明り残花ポツンと孤独なり

樋口元美

残花目に続く人生幸福ふ

武田重子

残桜やひとに黄昏あるやうに

日高道を

此の世をば去る人惜しむ残花かな

田中章嘉

喇叭音ひびく広場に残花かな

福田千春

日本語のやさしき語感名残の花

寺内洋子

安達太良の湯宿に残る桜かな

藤澤喜久

晩生なる子の可愛さや残る花

飛永 鼓

山肌を潤す慈雨や残花映ゆ

保坂翔太

歩くたび見上げて通る残花かな

南條きわゑ

全身に朝日吸ひ取る残花かな

西幅公子

残る花山の喫茶に客ふたり

野口和子

おめでたうの追伸うれし残花かな

野田静香

夕暮時街中の鐘残花かな

野村美子

# 山紫集作品評

## 網野月を

当て所なく連れに相槌残花道

篠原さよ子

中七の後に切れが生じると解して読んだ。「当て所なく」連れに相槌」をうっているのである。何気なく対応していて会話を楽しむどころか、半ば煩わしく思っている節がある。「連れ」の話が詰まらないのか、はたまた無関心な事柄なのかは分からない。句中にそのヒントを得る術はない。連れとの関係性も夫婦なのか、友人関係なのかも知れない。ただ桜の残る道筋を連れ立って歩んでいるのである。したが、もし中七のあとに切れがないとすれば、「当て所なく」桜の残る道筋をそぞろ歩いている、「連れに相槌」を打ちながら、とも解せる。むしろその方が、「連れ」には失礼が無いかも知れない。

残桜や味無きガムを噛んでをり

本橋稀香

上五の季語と中七座五の句意の密着度の高い一句である。「残桜」を見ることは「味無きガムを噛」む如し、と言わんばかりである。ただ否定的なイメージはない。味の感じられ

ないガムをいつまでも噛み続けているシチュエーションは、間々あることで、むしろ新しくガムを噛み出すことの煩わしさというか、味の無くなったガムを噛み続ける好もしさにも共感するところがあるのである。

真つ直ぐに散る日のありて残る花

飯塚智恵子

枝先を離れて真直ぐに散る花卉を見ている。真直ぐに散るとは、桜の散る原因が風であったり雨であったりしないということである。残花ともなれば、時が経つことと共に散るからである。そうした残花の限りある様を作者は看取つていようだ。今年の花を愛でられた幸いを感じながら、そしてその桜を看取ることに充実感を感じているのだろう。

身ひとつの熊野詣や残る花

青木鶴城

上五の「身ひとつ」は、単身で「熊野詣」をするという風にも解釈できるし、身軽な格好で「熊野詣」をするとも解釈できる。筆者は後者の身軽な格好で「熊野詣」をしたと解した。だからこそ、「残る花」を十分に愛でる余裕が出たということであろう。この身軽さと残花の表象性が絶妙に関係づけられている。

処方箋二度目の先に残花かな

吉川拓真

「二度目の先」は空間的な用法であろうか。それとも時間的な感覚であろうか。筆者は時間的な要素を含んでいると解

した。「処方箋」とあるから、病院通いをしてのことであろう。一度ならずも二度目の通院である。「残花」となった桜が作者を慰めている。

残る花縁起直しを口実に 丸山マスマ

句意を解するのには読者に多くが任されている句である。つまり座五の「口実に」の後に省略されている文言を読者がどのように補って解読するのか、ということである。大きく二様が想像される。一様は、花見に出かけたが既に「残る花」になってしまっていたので、残念会と称して、また来年の花見を期す意味でも皆さんと誘い合って二次会へ繰り出した、という解釈が成り立つ。もう一様は、なかなか花見に出かけられないでいたのだが、やっと花見へ出かけて「残る花」にはなってしまったのだが、名残りの花を見ることが出来た、とする解釈である。どちらも「残る花」を見る心なのだが、ポジティブな心持ちなのか、ネガティブな心持ちなのかの相違が存在する。また「口実に」の後には、二次会へ繰り出すでも良いだろうし、縁起直しになることであるなら読者の想像に任せてどのように文言を補って解読しても良いだろう。筆者にとっては、一様でももう一様でも、結果的に二次会へ繰り出す口実が出来れば、良いのであるが。

山あひの灯り集むる残花かな 秋谷風舎

上五の「山あひ」は表記とすれば山間（やまあひ・さんか

ん）であろうが、句意からすれば山峡（やまかひ）を想像させている。表記の読みに混乱をきたさない様に「山あひ」としたのである。また中七の「灯り」は「あかり」と読めるであろうか。稀に「ともり」とも読ませるようであるが、何方にしても人間がかかわっている灯である。宵の口に人の点す灯に密接し出されている「残花」と想像した。山間の人の生活に密接に繋がる桜なのである。

残桜や縁側に置く煙草盆 檜鼻ことは

作者ご自身か、またはお知り合いの方が大変な愛煙家なのではないだろうか。「残桜」を見上げながら、「煙草盆」を「縁側に置」いて、つまり煙草を楽しんでいらつしやる景であろう。全てを具象の中に収めて表現している。

小熊座やコタンの闇に名残花 池田珪子

中七の「コタンの闇」の解釈に読者の見解が異なることがあるかも知れない。筆者は、上五に「小熊座」とあるように、夜景であるところから村の中心から離れた、むしろ郊をイメージした。俳句ならではの美が存在しているようだ。

み吉野の裾に人垣残花かな 菅原卓郎

参議雅経の歌を惹起させるものがある。また、裾野の方には「残花」があつて、その「残花」を目当てに人も集まっていると解した。人というものは大自然に養われているのだなあと感じさせる句である。

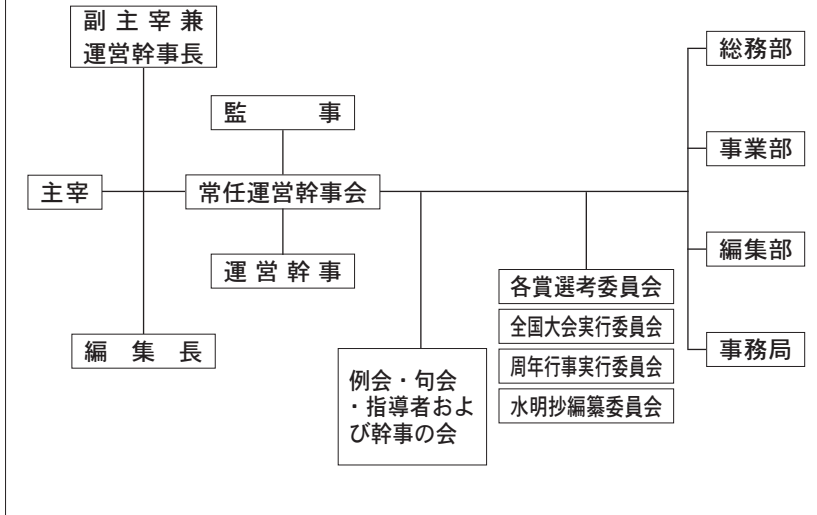
## 水明の運営組織 (令和6年7月1日より)

主 宰	山本鬼之介			
副主宰兼 運営幹事長	[渉外関係用務、編集企画用務] 網野月を			
編 集 長	大村節代			
常任運営幹事	網野月を	大村節代	石山かつ子	石井喜恵
	日高道を	青木鶴城	保坂翔太	曲淵徹雄
監 事	[水明俳句会及び水明発展基金の会計監査] 山中みどり 新 暦文			
運 営 幹 事	大橋廸代	檜鼻ことは	町野広子	近藤徹平
各 部				
総務部	[会計、会員に関する管理事務、各行事の受付事務、水明誌等の発送、発行所管理ほか庶務全般]			
	部長・日高道を	石井喜恵	菅原真理	岡田宣子
事業部	[水明俳句会各行事の企画・運営・実行、地方支部会員との連携、新規会員拡充の企画・運営・実行、ホームページの企画・運営・実行、俳句教室の企画・運営・実行、会員研修の企画・運営・実行、広報活動の企画・運営・実行、渉外関係用務、編集企画]			
	部長・青木鶴城	保坂翔太	曲淵徹雄	河野はるみ
		反町 修	小林京子	吉川拓真
編集部	[水明誌発行、全国大会資料の校正、水明誌の発送、その他編集関連用務]			
	部長 大村節代	石山かつ子	丸山マスミ	大塚茂子
		野田静香		
事務局	[常任運営幹事会の議案と議事録の作成]			
	局長 保坂翔太			

## 水明発展基金役員 (令和6年1月1日より)

会 長	山本鬼之介			
幹 事	網野月を	大村節代	日高道を	石山かつ子
	保坂翔太			
監 事	山中みどり	新 暦文		

水明俳句会の運営組織図（令和6年7月1日より）



俳句と随想12か月  
石井いさお・宮谷昌代

特集 耳を澄ませば、夏の音  
特別企画 佐藤紅緑の魅力―生誕一五〇年  
巻頭作品10句

# 俳壇

## 8月号

7月14日発売  
定価900円（税込）

巻頭エッセイ  
**今瀬剛一**

八木健選 滑稽俳壇

はりまだいすけ・笹瀬節子・渡井恵子  
小川晴子・橋本榮治・能村研三  
井上康明・西宮 舞

連載  
明日への扉……………山口昭男  
俳人の住む町…天野小石・亀井雉子男  
私の本棚・私の一冊……………伊丹啓子  
旧派の俳句……………秋尾 敏  
知つてるようで知らない俳句用語…井上泰至  
名句のしくみと条件……………坂口昌弘

新連載  
四季巡詠33句「第Ⅳ期」…鈴木しげを・名村早智子  
特別作品30句……………山口昭男

本阿弥書店 〒101-0064 東京都千代田区神田猿樂町2-1-8 三恵ビル 電話03（3294）7068 振替00100-5-164430

# 水明例会

## 第一例会（浦和）

茂木和子  
小林京子 報

首夏の花束栄転左遷みな同じ  
母の日や母在りし日の文の束  
郷里の名四股名に負ふや五月場所  
五月場所所桝席占むる抜衣紋  
客席の白き波立ち五月場所  
黄昏の逢瀬束の間螢の夜  
夏場所や波も昂る隅田川  
一座束ぬる寡黙の長や白緋  
「束の間の恋」の歌聞き新茶かな  
暖味な約束重し沙羅の花  
まげ結へぬ付人並ぶ五月場所  
夏場所の路地の其方此方触れ太鼓  
砂被りの藍の衣や五月場所  
夏場所や浪花仕立てのちやんこ鍋

延 昭  
順 子  
稀 香  
マスミ  
由紀子  
はるみ  
和 子  
以上特選  
マスミ  
節 代  
喜 恵  
はるみ  
卓 郎  
順 子  
徹 平

## 第二例会（東京）

山中みどり  
青木鶴城 報

「早めにね」と母の日の大き花束  
束の間の旨寝やひとり夏座敷  
湯に浮かぶ菖蒲の葉束広がれり  
束の間の車窓に惚け五月鯉  
薫風に解き放たる束ね髪  
五月場所験をかついで無精髭  
束の間のミニ庭園やバラ薫る  
鼻肩力士に熱きエールを五月場所

和 葉  
稀 香  
京 子  
拓 真  
由紀子  
延 昭  
チアキ  
和 子  
敏 江  
い ち  
い

夏衣身辺雑事軽やかに  
看護士の二の腕眩し夏衣  
湯上りの軽き立て膝夏衣  
孫よりのランチの誘ひ若葉風  
園児らの歓喜高まる若葉どき  
でで虫や返事のこないCメール  
あつばつば物干し竿にひるがへる  
生ひ茂る樺大樹や大日向  
夏衣茶会静寂抹茶喫す  
夏服やいつもかの日の匂ひして  
鍛金の波動を受くる樫若葉  
若葉風白のスニーカーで初歩き  
入山を迎ふる若葉靴の紐

サカエ  
みどり  
鶴 城  
以上特選  
敏 江  
峰 雄  
竺 仙  
妙 子  
サカエ  
り ち  
い ち  
士 史  
みどり  
鶴 城  
五明  
曲淵  
徹 雄  
昇 報  
順 子





白鷺の舞のましろに往生院  
行く春や二人つきりの句会閉つ  
入相の空白鷺の茜色  
街灯をまさぐる枝葉夏きざす  
義に生きし武士の墓風薫る

白鷺のゆく空映す田の鏡  
空に舞ふ白鷺一羽貨車ヤード  
白鷺の切り絵のごとく羽ばたけり  
シテ島より旅始まりぬ聖五月  
と見かう見して白鷺は風に佇つ  
白鷺の求愛恋の季節かな  
緑さす積石だけの無縁塚  
爪立つる白鷺息を呑む利那  
浄閑寺風にはろほろ藤の花  
入日燦白鷺の立つ水鏡

生垣を茶摘してゐる老夫婦  
幾星霜知覧の丘の茶摘唄  
逃げ水を追うて湧き来る旅心  
砂丘の駱駝逃水のゆるる中  
逃水と別れ故郷へ草の道  
全身の萌黄に染まる一番茶  
逃水やシエフの明かさぬ隠し味

順子  
理恵  
萬蝶  
徹雄

以上特選

千祐  
星歩  
順子  
萬蝶  
理恵  
喜久  
康世  
雅夫  
徹雄

石井喜恵  
反町修報

第四例会 (浦和)

以上特選

でん治  
昇  
マスマ  
延昭  
光紀子  
光子  
喜恵

逃水に吾が面相も映したき  
逃水に入りて溶けゆくバスの列  
逃水やベットボトルは空つぽに  
逃水やガウデイの夢はもしかして  
少年二人懲りずに逃水追ひにけり  
暮れ残る山を下るや茶摘籠  
逃水を遮二無二追うて晩年へ  
賑やかな茶摘みジープンJポップ  
特攻の若人哀し茶摘唄  
逃げ水や森の向かうに光堂  
逃水の果てに故山の白き峰  
逃げ水の先に寂光杉並木  
新茶摘む一芯二葉は掌のリズム  
赤樺峡山茶畑茶摘唄

古りし家をやさしく包む柿若葉  
はるかなる昭和が香る豆の飯  
カレンダーに緑のハート豆御飯  
老舗ホテル若葉の中の車寄せ  
満身に若葉の息吹富士樹海  
公達の盛衰秘むる山若葉  
まなざし凜と若葉明かりの弓道場

恵子  
寛治  
光子  
修

以上特選

曆文  
翔太  
玲子  
由紀子  
延昭  
でん治  
昇  
マスマ  
行雄  
喜恵

梅澤佐江  
河野はるみ

第五例会 (浦和)

以上特選

千祐  
宣子  
玲子  
佐江

今生の若葉の風に身をゆだね  
豆飯の湯気まみどりに香り立つ  
若葉風参道をゆく二人づれ  
町中に若葉沸き立ち大合唱  
白傘を薄青に染め若葉雨  
「清正」の井戸こんこんと若葉風  
若葉の道を車夫ゆつくりと角館  
豆飯やお代はりの碗ついと出づ

銅屋根の一字美し夏さくら  
「子科練」を伊達に歌ふや余花の風  
母の日を伊達な女の賢母なる  
古伊万里に薫焼きの香初鰯  
ひつそりと余花ひつそりと狩の道  
むらさきに木曾路けふるや余花の雨  
想ひ出を紡ぐや余花に辿り着く

玲子  
義子  
美佐尾  
知子  
千祐  
はるみ  
宣子  
佐江

以上特選

月を  
ひろこ  
京子  
鶴城  
千春  
佐江  
萬蝶

若松例会 (京橋)

正木萬蝶  
石田慶子

峡の余花風に季節を定めけり  
薄絹に残る移り香余花の雨  
伊曾保いそづぶを読み聞かせする夏の宵  
ふるさとに土産のマフィン余花一樹  
造成地の余花に見惚るる説明会  
川中の狭まる音も余花の谷

ひろこ

金色堂に眠る木乃伊や都草  
ばんからはまだ色褪せず夏桜  
空濠の中に道あり余花白し  
花巡りの杏子の墓や夏桜  
谷底の暗きに影の夏桜  
深山に余花を尋ぬる山男  
余花に会ふ月命日の庫裡の裏  
うすくれなるの余花に見えむ宇陀や初瀬

佐江 鶴城 稀香 マスミ 京子 星歩 千春 萬蝶

### 関西例会（大阪）

森本早苗 報

万緑に吸ひ込まれゆく峰行者  
行く春や浜に横たふ大錨  
万緑を浴びて跳ねるやすニーカー  
国生みの島に真つ向卯波立つ  
葉桜となり静もれる吉野いま  
万緑や魁夷の白馬はどの辺り  
若葉光嫁御取まる蛇の目傘

和子 玲子 千津子 道子 洋子 早苗

風薫る静けさ続く御所の堀  
薫風に薫き御門消を放つ  
万緑も岩崩落の跡消せず  
牛馬童子へお結び一つ万緑下  
夜行便のトラックが着く五月間  
此の村は母のふる里藤の花  
万緑や押したる逆さ太鼓判  
待ちかねて原付免許若葉風  
万緑や城くつきりや浮き立てり  
万緑や家中の窓開け放つ  
風薫る港神戸の色乗せて

以上特選  
玲子 千津子 和子 道子 洋子 早苗  
洋子 早苗  
嶋田 早苗

## 昔話あれこれ 39

### 嫡男敦敏の早世と実頼の嘆き

敦敏少将は、父より先に亡くなった。父  
実頼が大層悲嘆にくれていた時、東国  
から敦敏の死を知らずに馬を献上して  
来た。（敦敏の死947年、実頼の死  
970年）

実頼は、「敦敏の死を未だ知らない人も  
いるのだなあ。私も東路に行つて住んで  
いたら良かったのに。悲しいことだ。」と  
涙を拭った。

### 三島大明神、佐理の書を所望

佐理は敦敏少将の子である。  
当時の書道の達人（小野道風・藤原行成  
と佐理を三蹟と言った）である。

大宰大式の任が果て上京する途中、伊予  
の国の前の湊で天候が大層荒れた。少し  
天候が回復して船出しようとする、ま  
た同じように悪天候になる。

このようなことの繰り返しで幾日も経過  
したので、易者に尋ねると『神の祟り』と

いふばかりで、心当たりもない。  
不思議に思っていたところ、夢に大層気  
高い様子をした男性が現れて

「このように天候を悪くしているのは私  
なのです。全ての社には額が掛かってい  
るのに、私の社には無いので、掛けたい  
のだが、月並みの筆跡では良くないので、  
そなたに書いて貰いたいと思つて、悪天  
候にしてそなたを留めていたのです。」と  
言う。

佐理が「貴方様は何方でしょうか」と尋ね  
ると、「この浦の三島（瀬戸内海芸予海峡  
の中央新大三島に鎮座する大山祇神社）  
の翁である」と言つた。

こうして伊予の国に向かうと、空は晴れ  
渡り、追い風も吹いて飛ぶように三島に  
到着した。

心身共に潔斎して、衣冠束帯を付け神前  
で扁額を書いた。神官を呼んで作法通り  
に額を社頭に掲げた。

その後は、供の者の船も含めて平安に都  
に帰った。

こうして日本一の書家という評判を取つ  
たのである。（つづく）

各地句会



ミモザの会 (横浜)

信濃路や雨後のはんざき清らなり  
 風薫る牛若ひよいと五条橋  
 緑さす家族見守る古時計  
 五分刈りの君の白い歯アロハシヤツ  
 深山や山椒魚の悟り顔  
 はんざきや我にもありぬ深眠り  
 万緑の森の中より出発す  
 口開けて目葉さすや燕の子

櫻蔭句会 (浦和)

湧水に影のたゆたふ水芭蕉  
 至仏山眼下の沼の水芭蕉  
 文人の軌跡の浪漫本郷暮春  
 炭団坂登る下駄音夏近し  
 静かさをたたへて咲くや水芭蕉  
 水芭蕉山をのぞみて花開く

萬蝶 玲子 栄子 慶子 詠子 史代 亜弥子 千春 由紀子 美子 多美子 真理 久美子 千恵

花祭声明響く大伽藍  
 ミシン踏む明るき窓辺柿若葉  
 耳を立て風の声聞く水芭蕉  
 春惜しむ明石市場で買ふ釘煮  
 「二葉の井戸」に迷へる蝶の影  
 柿の木塾 (浦和)

青田風古民家カフェ開店す  
 一人づつ渡る木の橋青風  
 隧道抜け広き青田の人となる  
 風わたる青き棚田に若夫婦  
 生まるも死するもひとり青田風  
 アルプスの水掛け流し洗鯉  
 思ひ切り吸ふ体内に青田風  
 水明鬼石句会 (鬼石)  
 飛機雲の二等分する五月空  
 峠越えれば秩父路へ桐の花  
 今年竹前進はばむ歩道橋  
 りそな俳句会 (浦和)  
 巢立鳥駅舎の中を右左  
 南風吹く海一望の無人駅  
 手作りの隣家の巢箱巢立鳥  
 大南風航空母艦入港す  
 巢立鳥諄ひの無き国境へ

行雄 茂子 公子 美智枝 幸代 恵子 節代 和葉 章嘉 かつ子 昇 和子 聰子 和子 ナヲ子 勲 マシミ 久美子 建治郎 寛治

大南風島に一つの駐在所  
 南風や沖つ波間の離れ島  
 野菊の会 (与野)  
 命鮮やか新緑の全身浴  
 おだやかに海割るる日の若葉風  
 青葉風万歩あるいて楽しめり  
 新さんま焼きつ焼き餅妬く夕べ  
 「恋文横丁」にありきと梅雨湿り  
 吹奏楽部ぶかぶかどんと夏に入る  
 芽吹句会 (浦和)  
 蓑笠を吊す落柿舎雨蛙  
 宴さなか融けて細れる花水  
 マネキンはなべて細身よ夏めけり  
 夏めくや湖畔に白馬光りをり  
 生垣に触れゆく影の夏めけり  
 草陰にじつと雨待つ雨蛙  
 融然とひととき過ぐす薔薇の園  
 大仏の額に湿り夏めけり  
 芙蓉句会 (浦和)  
 小判草ならして風の通り道  
 飯の世をそれなりに生き新茶汲む  
 窓開ければ通り抜けるや草いさげ

道夫 雅夫 美代子 和子 清子 倭子 恵子 光子 玲子 修 千重子 富子 ひろこ 久美子 チアキ 道 美子 税仁

りんどう俳句会 (浦和)

薄暑はや法堂百畳開け放つ  
満開の役場のさつき復職す  
ロープウェイ開きて涼し天辺かな  
母の日や漢うろうろ花舗の前  
方三間の開山堂に若葉風  
夏めくや視線平らに直進す  
鯉のぼり大口開き天翔けり  
薔薇開く一花ごとくに幸を抱き  
水中花心開くもままならず  
夏めくや植物園を二度三度  
不条理な倅母の日生まれらし

寛治 君夫 弘夫 治子 風子 翔太 順子 まりこ 夕峰 卓郎

透き通る雨後の鳥声新茶汲む  
良き事は近くにありて新茶汲む  
風を呑み風によぢられて鯉のぼり  
新茶汲み白磁に落とすひすい色  
香水の壇は空つぽ姫鏡台  
仙台平の凜凜しき棋士や新樹光

蘭の会 (浦和)

麦秋や三本立てに原節子  
肩に受くる爆睡レディ麦の秋  
麦の秋こんがり焼けたパンが好き

風子 圭子 夕峰

麦の秋鬼の帰つたかくれんぼ  
波打つや蔵の四方は麦の秋

まりこ さよ子

和歌山水明句会 (和歌山)

麦の秋なるやら喋る飼鴉  
麦の秋旅する朝の無人駅  
袖口を二回折り上げ麦の秋  
国中の一本道や麦の秋  
帰省の子幸せ運ぶ家族かな  
夏めくや隣家の父子声の似て  
麦の秋風に獣の香雑ざる  
麦の秋一両だけの電車過ぐ  
二輪草流れの青き梓川

風舎 寿夫 律子 和子 伸子 小麦 月城 京子

トンネル三つ抜ければ迫る青葉潮  
急行の車窓一面麦の秋  
新緑が山襲うづむ神の山  
早朝の補習登校風薫る  
山火事ぞ百万本の緋のつつじ  
万緑や留学試験受くといふ  
新緑や山もこもこと肩を張り  
執刀は美男が良ろし聖五月

和子 道子 千枝子 千世子 満耶子 さわゑ 洋子 廸代

雛の会 (浦和)

熱くても冷めても旨し麦茶かな  
湧き水に麦茶の葉缶峠茶屋  
青葉の会 (浦和)  
梅雨の夜にグリム童話を読み聞かす  
卯の花や農を継ぐ子の逞しき  
店番をしながら読書十五の夏  
卯の花の匂ひかんばし駅フェンス  
花うつぎ足を止めさすその香り  
卯の花のこぼれを受くる鯉の口  
卯の花にばつと華やぐ誕生日  
卯の花や月夜に淡く里の道  
裏木戸をたわなに隠す卯の花よ

美江子 マスミ

手に馴染む万古の急須新茶汲む  
卯波立つ海神が守る漁師町  
これこそが新茶の味ぞああ旨し  
喉ごしに試飲の新茶香り立つ  
夕日受けサーファーの待つ大卯波

啓子 俱子 山遊 重子 藻好

透き通る雨後の鳥声新茶汲む  
良き事は近くにありて新茶汲む  
風を呑み風によぢられて鯉のぼり  
新茶汲み白磁に落とすひすい色  
香水の壇は空つぽ姫鏡台  
仙台平の凜凜しき棋士や新樹光

チアキ 燈女 公子 輝翠 喜恵 佐江

きざきサークル (浦和)  
薫風や礼拝堂に婚の鐘  
車椅子の母を押す子や風薫る  
薫風や宙をまさぐる象の鼻  
風薫る山の駅舎はログハウス  
風薫るタンゴの夕べ三步五歩  
青もみぢ薫風渉る秘湯宿  
薫風や鳶職人の歩く空

美子 啓子 美紗子 美智枝 真理 公子 洋子 和子 輝翠

きざきサークル (浦和)  
薫風や礼拝堂に婚の鐘  
車椅子の母を押す子や風薫る  
薫風や宙をまさぐる象の鼻  
風薫る山の駅舎はログハウス  
風薫るタンゴの夕べ三步五歩  
青もみぢ薫風渉る秘湯宿  
薫風や鳶職人の歩く空

啓子 俱子 山遊 重子 藻好

風子 圭子 夕峰

花うつぎ足を止めさすその香り  
卯の花のこぼれを受くる鯉の口  
卯の花にばつと華やぐ誕生日  
卯の花や月夜に淡く里の道  
裏木戸をたわなに隠す卯の花よ

美子 啓子 美紗子 美智枝 真理 公子 洋子 和子 輝翠

きざきサークル (浦和)  
薫風や礼拝堂に婚の鐘  
車椅子の母を押す子や風薫る  
薫風や宙をまさぐる象の鼻  
風薫る山の駅舎はログハウス  
風薫るタンゴの夕べ三步五歩  
青もみぢ薫風渉る秘湯宿  
薫風や鳶職人の歩く空

啓子 俱子 山遊 重子 藻好

風子 圭子 夕峰

花うつぎ足を止めさすその香り  
卯の花のこぼれを受くる鯉の口  
卯の花にばつと華やぐ誕生日  
卯の花や月夜に淡く里の道  
裏木戸をたわなに隠す卯の花よ

美子 啓子 美紗子 美智枝 真理 公子 洋子 和子 輝翠

きざきサークル (浦和)  
薫風や礼拝堂に婚の鐘  
車椅子の母を押す子や風薫る  
薫風や宙をまさぐる象の鼻  
風薫る山の駅舎はログハウス  
風薫るタンゴの夕べ三步五歩  
青もみぢ薫風渉る秘湯宿  
薫風や鳶職人の歩く空

啓子 俱子 山遊 重子 藻好

櫻の会 (浦和)

婚礼のチャペルへの道麦の秋  
新茶汲む孫は大人の顔になり  
移住者で活気づく村麦の秋  
世の隅に生きて麦秋空仰ぐ  
麦秋や一本道の風を見る  
新茶汲む茶葉はサラダに茶飯にも  
新茶かな奢りし菓子を引き立てて

鶴川山百合句会 (町田)

理科帳は置いて野に出よクローバー  
メーデーや妻と分け合ふ恵方巻  
恵の雨恵の空や花万朶  
理屈つばい男は苦手梨の花  
理屈だけの料理けつこう春筍  
理系女子のネイル金色入学式  
餌を捕るつばめ見張りをするつばめ  
御朱印は石段のさき花水木  
寄り添ひて比翼連理の翁草  
瑠璃草のえくば並びし理容店  
若狭水明会 (若狭)  
陽炎や一両電車歪み来る  
陽炎や我が人生は半ばなり  
漕ぎ過ぎて有頂天なる半仙戯

治子  
あつ子  
朋子  
裕誌  
富子  
文子  
千重子  
雄二郎  
月を  
史代  
広子  
千春  
萬蝶  
理恵  
美千子  
うさぎ  
玲子  
郁子  
友夏  
保人

鞆や足でつかみし空の雲  
鞆や晚鐘の余韻背で聞く  
願ひ事叶ひ社日の農夫婦  
ヒーロー気分となりて半仙戯  
ふらここや母さんが居て父が居て  
ふらここや記憶の小箱ボンと開く  
ぶらんこに母の大声「こはんやで」  
見る物は生き生き光る春の色  
水明濤つくし句会 (大阪)

老木に年輪背負ひ蝸牛  
万緑に染まりたるまで居る独り  
万緑に呑み込まれゆく棚田かな  
野ばらの会 (浦和)  
鐘樓を借景にして山法師  
那智の滝見上ぐる人の無策かな  
老いてなほ無い物ねだり夏の星  
斎場に淡雪のごと山法師  
新緑や掃き清めたる無縁墓地  
蛸の会 (浦和)  
玉の汗美人づくりの湯で流す  
筍のお色直しや夕餉食ふ  
母と行く檜葉の湯澄みて流す汗  
湯上りの童のうなじ筍や

八重子  
初花  
寛久  
祥子  
ことは  
笑風  
和風  
白鷺  
智恵子  
人美  
洋子  
秀子  
茂子  
夏江  
栄子  
みさ子  
さち子  
風舎  
幸子  
夏野

筍の剥がした皮の多さかな  
筍のけものめく皮巻き落ちて  
筍を握る名人の蹠よ  
筍や鉢を突きぬけけらの声  
筍をもらひし夜の降り酒  
竹の籠に筍を盛る足りかな  
聞き耳に吾が名飛び出す脇の汗  
糠添へて筍二本届きをり  
阜月の会 (浦和)  
校庭を足環の小鳩愛鳥日  
自動車空を飛ぶ日やバードデー  
武者人形を高きに飾る本陣宿  
論客の古語文法や袋角  
我が一生客商売の涼み茶屋  
やまびこの輪唱弾む愛鳥日  
病室に孫の御守り若葉風  
桐の花この子が嫁にゆくときは  
列島は地震の巣なり心太  
たかな俳句会 (川口)  
母寝ぬればたちまち寝息芒種かな  
草笛や記憶の祖母は割烹着  
屋敷稻荷の辺り一面路茂る  
肩書きを失くす肩身や袋角  
路の葉の重なり合うて風の道

ひさの  
秀子  
元美  
しるく  
礼子  
月を  
鶴城  
宣子  
山菜  
更穂  
光代  
珪子  
紀子  
静香  
暦文  
美佐尾  
さいち  
のり子  
小麦  
小義  
鶴子  
静城  
香

コクーンシティカルチャイ俳句教室 (さいたま新都心)

隧道に「敬天愛人」花は葉に

葉桜や詰襟さまになつて来し

葉桜やじやこ天つまみ小昼とす

葉桜やビルの谷間の朱の鳥居

リラの雨牧のサイロの老いた白

鳥賊火燃えかすかに聞こゆおけさ節

元寇かくや対馬を囲む鳥賊釣火

水明熊谷句会 (熊谷)

湯上がりの美人がによつと青簾

琉金に聴かせてみたき円舞曲

病葉や斑模様の大都会

婆ひとり日がな金魚に声かけて

トーストを齧りつつ撒く金魚の餌

蘭鑄は無愛想なり応接間

黒潮を奔る美丈夫初松魚

緋の金魚商ふ店や「金魚坂」

小梅の会 (浦和)

仏壇にカーネーションとかりん糖

早朝の洗車のしぶき柿若葉

異空間に佇む初夏の美術展

見わたせば競ふ若葉のてんこ盛り

春敵に勝利の美酒の端居かな

俳句の手ほどき (山右棍)

朗朗の披講に名告風薫る

恋の夢覚むる短夜明告鳥

聳え立つ白衣観音薄暑光

辞むること告ぐる蚕豆剥きながら

逆走の自転車騒す街薄暑かな

音遠く消ゆる機影の薄暑かな

駅ピアノ風に流れて夕薄暑

若者の路上ライブや薄暑光

時告ぐる晚鐘の音や初夏の空

愛犬に別れを告げり夏はじめ

総員のならば甲板波薄暑

子に告ぐる広告の品夏帽子

ひとごゑのとどこかぬ高さ街薄暑

円卓の会 (浦和)

菖蒲貫ひ風呂を洗ふや妻は旅

獲物追ひ田水を揺らす青大将

芝居跳ね天井棧敷裏梅雨入

緑雨始まるペンキめく風と共に

ころころと笑ふ少女の手にラムネ

駆けて来る猫の口より蛇泳ぐ

指折りに字余り削る夜半の月

不細工なタトウのかひな青風

風青しサンドキツチをさくと切る

神戸大池句会 (神戸)

糶浦はすぐ瀬戸の海風薫る

昼網や薫風にのり大漁旗

流暢な糶人の声青鷺来る

若鮎句会 (浦和)

青風吹き上げ浮かぶ富士の峰

青風楠一本ここに在り

青風鬼剣舞に澄む山河

鎌倉や御朱印女子の夏帽子

母の杖そつと手を添ふ青風

青風吾も宙吊りエプロンも

印結ぶ露座仏の眼に月涼し

挨拶を求むる社長めだか飼ふ

消印は紛争の国夏風

こぼれ落つひかりの渦にシロメダカ

若楠句会 (浦和)

笑ひ声絶えぬ家族や夏来る

薫風や夫のウクレレ軽やかに

大鳥居抜け薫風のつづら折り

一人でも「乾杯」の声缶ビール

目を合はせ挨拶する兎風薫る

麦の秋声なき声の異国より

初めての売上げトップ風薫る

延昭 俱子 洋子 健司 由美子 美枝子 昇

風子 秀子 道子 燈子 栄子 徹平 卓郎 茂子

進 隆文 惠子 隆然 道

延昭 佐江 徹平 義子 翔太 忠男 美子 桂子 久美子 幸代 卓郎 千アキ かつ子

翔太 修 京子 拓真 静香 輝翠 道香 月城 鶴

玲子 千津子 早苗

真貴 芳春 稀香 拓真 秀子 月城 鶴夫 喜夫

葉美 真由美 直子 京子 風舎 鶴城 宏治

珊瑚の会 (浦和)

卯月波砂浜駆くる女騎手  
 風をさる少女ひらりと更衣  
 江の島を右手に置きて卯波立つ  
 とり立てて何着るでなし更衣  
 衣更へて歩巾大きく歩みけり  
 衣更急に仕草が大人びて  
 追憶をさらりと羽織り衣更  
 磯笛を浜に乗せ来る卯月波  
 衣更へて小粋に越ゆる八十路坂  
 更衣ちよつと気取つて若ぶつて

惠子 史代 広子 和子 和葉 かつ子 喜恵 マスミ 昇代

新樹の会 (浦和)

混浴の山の露天湯葭簀張  
 天窓に張り付く家守ノクタン  
 二人には広き食卓柏餅  
 波のりや天国地獄往来す  
 女系家族に初の男の子や柏餅  
 柏餅姉さん被り母の手で  
 天秤のへつぱり腰や金魚売  
 めだか句会 (浦和)  
 紫陽花や色をかさねるメニユー板  
 山蔭に紫陽花の群崖一面  
 薄暑光婆さん寝てる足湯かな

風子 清吉 徹修 道通 平鶴 鶴城 妙子 莊志 楽

白線にレギュラー並び薄暑光  
 雨後あをあをと水分のあちさるや  
 紫陽花やかつて栄えし蔵の街  
 赤白青黄得点待ちの夕薄暑  
 薄暑光彩とりどりの花踊る  
 風薫る英気吸ひ込む旅途上  
 風薫るさあさ英京橋渡たる  
 五月雨や英霊たちの沈む海  
 英英と明治の杜や新樹光  
 紫陽花は押し合ひへし合ひ丸くなる

灯留 比早子 六弦 敦子 千鶴子 知子 月城 鶴城 はるみ 三茅

若枝句会 (浦和)  
 香り立つ一服の茶や若葉雨  
 若葉寒名のかすれたる追悼碑  
 風そよぐ森の膨らむ若葉時  
 母の日やレジ待つ子らの初初し  
 救急車帰路は安堵の風薫る

美佐子 貞代 泰子 敏江 みどり

☆ ☆

通信添削指導のご案内

季音同人を除く水明会員を対象に、通信添削指導を実施しています。  
 希望者は、下記により作品を送って下さい。 主宰 山本鬼之介

- [ 指導者 ] 網野月を  
 [ 作品 ] 5句 [受講料] 1,000円  
 [ 方法 ] ①用紙自由 ②住所・氏名・電話番号を明記 ③84円切手を同封 ④返信用封筒は 不要 ⑤締切なしで随時受付  
 [ 送付先 ] 網野月を 電話 080-7580-0208  
 〒338-0012 さいたま市中央区大戸 1-31-2



風 声

○俳句四季五月号——「季語を詠む」欄

金雀枝は至上の恋の宿る花

鬼之介

○現代俳句五月号——「第十五回現代俳句の風」欄

花筏かつて不浄門なる三文字

菊池ひろこ

蜷汁口割らぬ奴二つ三つ

梅澤輝翠

緑立つ鳩抱く少女眉目美し

大塚茂子

丹精のおぼろ豆腐や梅真白

越田栄子

花鳥賊はいろこの宮の速達便

本橋稀香

○現代俳句五月号——「新入会員記念作品」欄

初雪や萩の湯呑みと花林糖

池田珪子

絵付けする胡坐の少女青木の実

野村美子

語り部や遠野の里の暮の秋

〃

朝寒や現場を仕切る鳶頭

川崎道子

昨日より濃く見ゆ潮目日脚伸ぶ

〃

春の宵衣桁の晴着すべり落つ

綿引まりこ

凍鶴のいま渾身の一步かな

〃

寒鯛や回転寿司の金の皿

反町 修

空つ風字の消えたる吾が故郷

〃

寒椿かなしさ裏むほど深紅

霜多光代

菜の花は平和の色や童うた

〃

清流の勢ひに勝る蟬時雨

葛城千世子

大人の歯生え冬林檎食むびびき

〃

自家菜園のみの食采夏料理

西浦千枝子

煙突ないとサンタ来ないと子の真顔

〃

○饗焰(米田規子主宰)五月号——「一誌一句」欄

花丸を付けたやりたき冬の月

鬼之介

○くぢら(中尾公彦主宰)五月号——「受贈俳誌美術館」欄

春炬燵足で挨拶して去ぬる

鬼之介

○幻(西谷剛周主宰)五月号——「受贈誌拝見」欄

フランスパンは立てて持つもの木の芽道

鬼之介

○好日(高橋健文主宰)五月号——「受贈誌御礼」欄

練堀のほどよき高さ寒椿

鬼之介

○玉梓(名村早智子主宰)五・六月号——「他誌拝見」欄

淡雪に雪見灯籠調ひぬ

鬼之介

○暖響(江中真弓選者)五月号——「俳誌散策」欄

村松さくゑ氏の「水明二月号」の鑑賞

山本鬼之介

門の一途な構へ去年今年

〃

襲名の楽屋暖簾に淑気充つ

主宰山本鬼之介氏の「おはこ」八句中の二句。一句目、

最近ではセキユリテイの普及により昔ながらの門を観る機

会は少なく、偶に閑所の門、祭屋台や太鼓倉、旧家の倉な

どで見かける。新年を迎え、皆が初詣やお屠蘇気分の時も

門は字面の通り敵めしい顔で任務を全うしている。「一途

な構へ」が言い得て妙だ。二句目、「襲名の楽屋暖簾」と

いえばこの度の第十三代市川團十郎白猿丈のことであろう。

鬼之介氏は新春襲名披露にて十八番を御覧になり、楽屋を

訪ねられたのだろう。最員の役者さんに贈る楽屋暖簾は、



楽屋の前に掛け、公私の間仕切として欠かせない特別のも  
のという。千両役者の淑氣に満ちた楽屋暖簾が見えるよう  
だ。

同人作品 季音「雪」より

日向ぼこ生きる証の爪を切る

柚木治子

極月の京に役者の一睨み

由良ゆら女

○対岸（今瀬剛一主宰）五月号——「結社誌を訪ねて」欄

中原修子氏の鑑賞により

花丸を付けてやりたき冬の月

山本鬼之介

月は、美しさも風情も秋が一番素晴らしいのでしようが、  
花丸を付けてあげたいほどこの日の月も素晴らしかったの  
です。冬冷えの空にみごとに満月が懸かっており、この望  
月は中秋の満月に少しも遜色ないと作者は感じます。「や  
りたき」と連体形で繋げることにより、「冬の月」へまっ  
すぐに修飾が掛かります。「花丸」は単なる丸や大丸より  
一段と高い評価であり、より心理的に褒め称える印象が強  
く、子供たちはとても喜びます。冬の月も小躍りして喜ん  
でいることでしょう。

○泰山木（松田碧霞主宰）五月号——「受贈俳誌紹介」欄

銅像の人馬もろとも牙返る

鬼之介

○菜の花（伊藤政美主宰）五月号——「諸家近詠」欄

銅像の人馬もろとも牙返る

鬼之介

○罨（山本一步主宰）五月号——「受贈誌の一句」欄

風神の怒りの袋虎落笛

池田珪子

（日高道を抄出）

## 水明の記事掲載他誌より転載

『俳壇』 十二月号  
俳壇ワイド作品集  
今月の編集長

ぶらぶらと

大村節代  
〔水明〕

花の道先師の句碑に会ひに行く  
狽<sup>うしろ</sup>守る 神道に散る 桜  
さくらさくら親子三代宮参り  
老木に咲きし徒花鳩遊ぶ  
花びらと雲とさざ波ゆるる沼  
桜満開ベンチで食ぶる握り飯  
獲物放ちて帰る釣人花流る

### ◆作句信案

長谷川かな女の創立した「水明」は、現在の山本鬼之介主宰が五代目  
です。かな女は浦和市（現さいたま市）の名誉市民で、市内二か所に句  
碑があります。近頃私は、淡淡と句を詠み楽しみたいと思っています。  
（生涯の影響ある杯<sup>はつ</sup>の天地かな 調神社）（曼珠沙華あつまり丘をうかせ  
けり 別所沼公園）

### 誤植訂正

六月号に誤植がありました。慎んでお詫び致します。  
一四頁下段  
火袋に光の春よ横溢す  
大袋に光の春よ横溢す  
椎野美代子  
椎野美代子

# 水明夏行のご案内

下記の日程にて水明恒例の夏行を開催いたします。添付の指定「参加申込書」を使用し、参加費を添えて7月22日(月)必着で発行所総務部までお申し込み下さい。大勢の皆さんのご参加をお待ちしております。なお、皆勤賞を用意しております。

夏行は俳句の基本の一つである〈席題〉で詠むことを勉強する場です。各日共に季語に拠る題一題、詠込による題一題が出題されて、計三句を投句していただきます。

**【夏 行】**第1日目:令和6年7月29日(月)13:00～17:00(12:30 受付)

第2日目:令和6年7月30日(火)13:00～17:00(12:30 受付)

第3日目:令和6年7月31日(水)11:30～17:00(11:00 受付)

※第3日目の開始時刻は1時間30分早くなっております。

**【会 場】**JR 浦和駅東口「浦和パルコ」10階

浦和コミュニティーセンター

第1日目／第13会議室

第2日目／第14集会室

第3日目／第13集会室

**【参加費】**夏行：各日 1,000 円

**【申込締切】**7月22日発行所必着にて

事業部

61

# 第61回現代俳句全国大会

投句締切は  
7月31日(必着)

WEB投句はこちら



# 作品募集

現代俳句全国大会は、年に一度、現代俳句協会が主催して行う伝統のある大会です。協会員に限らずどなたでも参加できますから、例年にも増してたくさんのご応募をお待ちしております。また、投句料の一部を能登半島地震の復興支援として寄付いたします。

- 応募規定 3句一組・2千円 何組でも可  
ただし、新作未発表作品に限る。(3組  
9句同時投句に限り、6千円を5千円に  
いたします)
- 前書き不可。所定用紙使用又はWEB  
〒、住所、お名前、電話番号、協会員・  
会員外の別を明記。投句料は普通為替  
定額小為替(無記名で、現金書留(必ず  
作品同封)、又は郵便払込(青い払込取扱  
票を使用)) 加入者名・一般社団法人現代俳  
句協会、振替口座番号・0016016  
152603・振替払込受領証のコピー  
を投句用紙に必ず貼付してください。
- 送付先 〒101-0021 東京都千代田区外神田  
6-15-4 借楽ビル外神田7階  
一般社団法人 現代俳句協会全国大会係  
☎03-3839-8190
- 締切 7月31日必着
- 顕彰 協会の会員誌「現代俳句」に優秀  
作品を発表するほか、協会刊行物に採録  
賞 大会賞、後援団体賞、特別選者賞  
秀逸賞、佳作。
- 全国大会  
令和6年11月16日(土)午後一時より  
「ホテル日航奈良」  
〒630-8122 奈良県奈良市三条本町8-1  
☎0742-135-8831
- 記念講演 坪内稔典氏 「俳句の未来」
- 講評 高野ムツオ会長はじめ協会幹部
- 懇親会 午後5時より(会費8千円)

[主催] 一般社団法人 現代俳句協会 [後援] 文化庁・毎日新聞社・朝日新聞社・読売新聞社

俳句

8月号  
予告

7月25日発売  
予価1,300円(本体1,182円)(税別)

巻頭作品50句 片山由美子  
 作品21句 仁平勝・対馬康子

## 専門家と 味わう俳句

**特別座談会**  
 奥本大三郎(「ファール昆虫館」館長)×  
 片岡信和(気象予報士)×  
 神野紗希×西村麒麟

令和俳壇 題詠……夏井いつき  
 雑詠……五十嵐秀彦・小林貴子他8名

好評 運載 俳句の水脈・血脈／蛭笏賞の歴史／小林秀雄の眼と俳句

付録 季寄せを兼ねた**俳句手帖秋**

※内装は変更になる場合があります。

**電子版同時発売!** 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>) など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

# 後記

水明の全国大会は六月二九日に  
恙無く行われました。

受賞の方々、昇欄の方々、新入  
会、新同人の方々そして、若狭や  
関西はじめ多数の水明会員が出席  
し、さいたま共済会館にて、挙行  
されました。九月号にて全国大会  
と祝賀会のご報告と兼題句の主宰  
選を特集します。全国大会へご出  
席された方もされなかった方も、  
どうぞ九月号を楽しみにお待ち下  
さい。

ところで、六月号六二頁にて、  
「水明」年間予定表が掲載されま  
したが、ご覧頂けましたか。最大  
の変更は十一月、十二月号が合併  
号となった事です。

「夏季競詠」が合併号に移りま  
す。これにより「夏季競詠」は「水  
明競詠」と名称も変更となり、八  
月号で募集となります。季語も夏  
の季語から秋の季語となります。

諸般の事情を考慮されて、どう  
ぞご協力の程、よろしくお願いし  
ます。

近頃の天気は異常です。いよいよ  
地球がぶっこわれてしまったの  
でしょうか。

長い冬が終わって春が来た喜び、  
暑い夏が終わって爽秋を迎えるう  
れしさ。

日本の四季は素晴らしいと思  
います。特に春と秋は本当に良い季  
節でした。旅行や散歩、吟行等  
もってこいです。昔は秋が良いと  
思っていましたがいづの頃からか、  
春が好きになりました。

それが近頃は、春なのに梅雨の  
ような日々、しかし梅雨にはなら  
ず、急に三十度以上の真夏日にな  
ったりで、体が悲鳴を上げていま  
す。追討ちをかけるように電気代  
の値上げのニュースや熱中症のニ  
ュースです。今年の夏はどれだけ  
暑くなるのでしょうか。

皆様にはお体お大切に。(節代)

今月のはてな？

- 沼縄 (ぬなわ)
- 榊 (たぶのき)
- 土器 (かわらけ)
- 深蓀 (あやめ)
- 鋒 (きつさき)
- 水塚 (みづか)
- 淡竹 (はちく)
- 足日 (たるひ)
- 初松魚 (かつお)
- 英京橋 (ロンドンばし)
- 裏 (つむむ)

## 水明発行所受付時間

(048-822-4741)

曜日：(月・火・水・木・金)

時間：12時半～午後4時半

(土・日・祭日は休み)

水明の行事と重なった時は休み

(上記の時間には係がおりますので、

ご利用の方は 時間内にお願ひします。)

78 77 76 75 59 42 32 21 19 17 6 頁

# 水明

令和六年七月号  
通巻一一二六号  
令和六年七月一日発行

発行所 水明俳句会

〒330-0064 さいたま市浦和区岸町四一〇二二  
電話 048-822-4741

ホームページ

「水明俳句会」で検索

誌代 半年分 六、〇〇〇円

一年分 一二、〇〇〇円

同人費 (誌代を含む)

一年分 二四、〇〇〇円

季音同人費 (誌代を含む)

一年分 三〇、〇〇〇円

振替〇〇一七〇一〇一九三九三

発行人 山本 鬼之介

印刷所 中央 美 版

# 令和6年水明夏行

きりとりせん

## 参加申込書 〈申込締切 7月22日発行所必着〉

夏行第1日目	7月29日(月) 13:00～17:00	会費 ¥1,000円	出席・欠席
夏行第2日目	7月30日(火) 13:00～17:00	会費 ¥1,000円	出席・欠席
夏行第3日目	7月31日(水) 11:30～17:00	会費 ¥1,000円	出席・欠席

※出席もしくは欠席を○で囲んでください。

合計金額	¥	—
------	---	---

※会費合計金額を記入してください。

※上記参加費を添えて申し込みます。

2024年7月 日

住所	〒		
氏名		電話	( )

### 申込書送付先

〒330-0064 さいたま市浦和区岸町4-10-21 水明俳句会

[緊急連絡先電話番号]

電話番号	( )
氏名	

※緊急時に備えて緊急連絡先電話番号をお届けください。

緊急時に使用し他の用途には使用いたしません。



# 季音 雪・月・花

九月号 七月二十五日締切

※雪・月・花の該当欄を赤丸で囲む事

氏名(俳号)

題	

最上部の枠から間を開けずに楷書で丁寧に書きさしてください。


(注意)

この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。

旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先(電話番号)

氏名(本名)

年齢

歳





# 水明集

十月号 七月二十五日締切

都市町	都・市・町名
	氏名(番号)

最上部の枠から間を開けずに楷書で丁寧にお書きください。


(注意)

この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。  
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先(電話番号)

氏名(本名)

年齢

歳



山紫集

十月号 七月二十五日締切

氏名(併号)	
--------	--

七月の兼題 「病葉」 (傍題可)

投句対象者 同人及び季音同人「花欄」「月欄」

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

※最上部の枠から間を開けずに楷書でお書きください。

(注意) この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。

旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先 (電話番号)  
氏名 (本名)

年齢 歳



きりとりせん

# 水明通信

都市又は府県名	
姓並びに俳優名	

通信欄（近況・感想など）自由に書き下さい


送り先 〒三三〇・〇〇六四 さいたまし浦和区岸町四十一二二 水明発行所

新誌友紹介 下記の方が入会を希望していますので、見本誌をお送りください

住所	〒 -		
氏名		電話番号	- -



## 季音抄

山本鬼之介

万緑や馬上の一矢的を割る  
風穴の出口は何処蚊食鳥  
かの人の草矢の的になるもよし  
春愁を長く曳きずる遠汽笛  
生垣に触れゆく影の夏めけり  
元寇かくや対馬を囲む烏賊釣火  
切株に腰を預けて初夏の風  
夏めくや合せ鏡に海の青  
つづら屋の漆の匂ひ路地薄暑  
薫風や宙をまさぐる象の鼻  
裏木戸や束の間に張る蜘蛛の網  
夏めくや畳の匂ふ奥座敷  
初めてのコーラを飲む子夏来る  
露の葉の重なり合うて風の道  
藤若葉房の容に垂るるや  
街灯をまさぐる枝葉夏きざす  
ふるさとは水田の匂ひ夏めきぬ  
「一苾二葉」を学ぶ学童一番茶

大橋勉代  
大村節代  
小倉倭子  
栢尾さく子  
菊池ひろこ  
五明昇  
松宮保人  
大場順子  
梅澤佐江  
荒井俱子  
近藤徹平  
高島寛治  
石川理恵  
野田静香  
河野はるみ  
曲淵徹雄  
横山君夫  
保坂翔太

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

### ▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内

(句に雑誌名、句集名、刊行月を付す)

### ▼散歩道へ身辺トピック

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内

(題をつけて)

### ▼山紫水明へ随筆

テーマ：自由

枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

# 水 明 抄

山本鬼之介

強面の忠義面して義士祭へ  
 店番に寡黙なオウム四月馬鹿  
 遠足の腕白揺らすかづら橋  
 夏近し青海波透く薄造り  
 記念日にひな菊の束胸に抱く  
 酒星や枘に塩盛る粋な人  
 春雷や水草揺れて泡ひとつ  
 バカラにワイン信楽焼に田螺和  
 枘酒に花片浮かせ友を待つ  
 遠足のどの子も毬のごとく跳ね  
 若松の朝日に香る白寿かな  
 朧三日月江戸の義賊の心ばへ  
 春夕焼トランペットを吹くをこ  
 月おぼろ未完のままのノクターン  
 猫の行く夜道明るし遅桜  
 炊飯器鳴いて目覚むる昭和の日  
 逃水や消印の無きラヴレター  
 初虹や森の泉のあたりより

清水桂子  
 菅原卓郎  
 新 曆文  
 岡田宣子  
 菅原真理  
 小林京子  
 寺町知子  
 池田珪子  
 門真宏治  
 篠崎紀子  
 霜多光代  
 阿部幸代  
 反町 修  
 丸屋詠子  
 山岸久美子  
 森下山菜  
 皆川更穂  
 加藤でん治

水明例会案内	句会名	日 時	会 場	指 導 者	幹 事
	第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	茂小 木林和京子
	第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山青中みどり 木鶴城
	第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五曲 明 昇 淵 徹 雄
	第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	石井 喜 恵 反 町 修
	第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤 佐 江 河野はるみ
	若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木 萬 蝶 石田 慶 子
	関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化(セ)	大橋勉代	森本 早 苗

水 明

令和六年七月一日発行 毎月一日発行

(第九十七巻 第七号)

定価 一〇〇〇円